

研究主題

「個性を伸ばし、創造性を育む学習指導の充実」 ～体験的な活動をとおり、科学的な思考力を伸ばす理科指導の工夫～ 川越市立川越第一小学校

研究のポイント

- 意識調査、学力調査の分析等から課題を明確にして学校研究に取り組んだ。
- 理科離れをなくし、科学的な思考力を伸ばすため、体験的な学習や問題解決的な学習を多く取り入れた学習過程の工夫・改善に取り組んだ。
- 共通したノート指導の手引きと板書計画を作り、基礎基本の徹底を図り、言語活動の充実を目指した。
- 理科支援員、学校間連携での中学校の理科教師、高等学校の生徒等による学習への支援を行い、理科に関心を持ち、理科好きな児童を育てることを目指した。
- 岩石園の整備、樹木プレート、理科コーナーの設置等環境整備を行い、理科への関心を高め、理科の生活化を図った。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

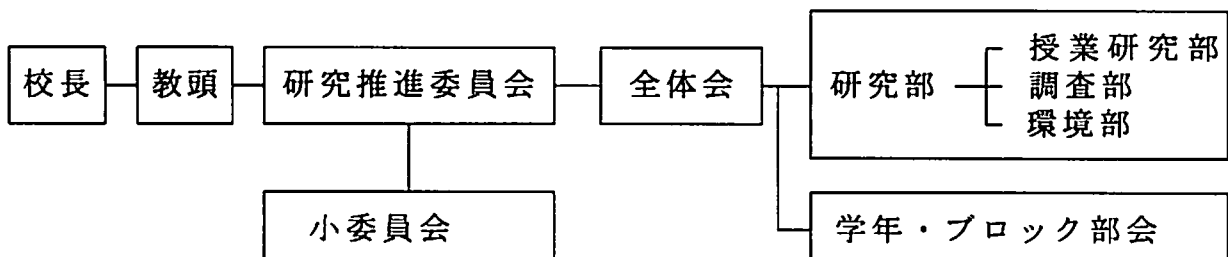
近年、理科離れや科学的な思考力の低下等が言われているが、本校でも、各種調査の結果から、理科の結果が他の教科に比べ低い水準になっている現状がある。また、理科好きな児童が多い反面、基礎基本の定着、科学的な思考力の低下等の課題が上がっている。さらに、本校の学区が市街地であり生活での自然体験が乏しいという実態がある。

このような実態を踏まえて、児童が主体的に学べるように体験的な学習を多く取り入れ、実感を伴った理解を図り、科学的な思考力・表現力を育むことを目指して指導方法の工夫・改善を図っていくことにした。

(2) 研究主題設定の理由

本校の学校教育目標「四つのだいじ」（いのちをだいじに、人をだいじに、心をだいじに、ものをだいじに）の具現化を目指し、研究主題を「個性を伸ばし、創造性を育む学習指導の充実」、副題を「体験的な活動をとおり、科学的な思考力を伸ばす理科指導の工夫」とした。

(3) 研究組織



2 研究の内容

(1) 研究仮説

- ① 五感を豊かに働かせる観察・実験や具体的な活動を多く取り入れ、問題解決的な学習活動を展開すれば、新しい発見や出会いに感動し、自然の事象に主体的に働きかける児童が育成できるであろう。

- ② 児童の実態を把握し、一人一人が自然と関わる学習活動を展開すれば、自然に親しみ、自然を愛し、生命や環境を大切にしようとする心豊かな児童が育成できるであろう。
- ③ 理科の学習と、実生活とを結びつけた授業を展開し、表現活動や意見交換をする場を工夫すれば、自然に対する見方や科学的な思考力を深め、自然の性質や規則性を生活の中で実感し、生かそうとする児童が育成できるであろう。

(2) 具体的な手立て

- ① めあてのめたせ方の工夫
- ② 問題解決能力に観点をあてた学び方
- ③ 実験・観察の場、用具の工夫
- ④ 活動をもとにした表現活動の工夫
- ⑤ 評価の工夫

3 実践事例

(1) 授業研究部

- ① 理科の授業での学習過程を明確にし、指導案の形式を決めた

授業展開例			
問題解決過程	指導過程	指導の留意点	評価【観点】
事象	事象提示	授業における学習内容に児童の興味・関心をひきつける。 ・児童の常識が覆るような事象 ・児童の知的好奇心をくすぐるような事象 ・児童の心理を逆手にとるような事象	提示された事象に興味・関心を持っているか。【関心・意欲・態度】
問題	問題把握	児童の疑問など、児童の探求に沿った設定を行う。(考察するための疑問となるもの) ・「～しよう」ではなく、「～はどうしてか」という表現	自ら問題を見出しているか。【思考・表現】
予想・計画	予想・計画	問題に対してどのような考えをもつかを整理する。 ・過去の自分の経験をもとに書かせる ・検証可能な計画かどうかを助言する	既習事項を生かして予想をし、表現しているか。【思考・表現】
観察・実験	観察・実験	観察・実験的の説明を簡潔にし、活動時間を確保する。	目的に応じて適切に観察・実験しているか。【知識・技能】
結果・考察	結果・考察	結果をもとに、分かったことを考えさせる。児童一人一人が自分なりの考えをもてるようにする。 考察したものを全体で交流させ、問題に対する結論を練り上げる。	観察・実験の結果と予想を照らし合わせて考察し、自分の考えを表現しているか。【思考・表現】
まとめ	結論提示	練り上げで明らかになったことをもとに、まとめる。 ・授業の日課がこのまとめとなるようにする	問題解決を通して科学的な言葉や概念を獲得しているか。【知識・技能】
活用	活用	獲得した知識や技能を活用し、実験の日常生活の中で活用する。	日常生活や自然現象を科学的な見方で捉えようとしているか。【関心・意欲・態度】

② 全学年で共通したノート書き方を示した。

ノート例

<p>日 天気 (第1時は単元名も)</p>	結果
<p>問題</p>	<p>問題は黒えんぴつで囲む。</p>
<p>予想</p>	<p>考察</p>
<p>調べ 方法</p>	<p>まとめ</p>
<p>授業の流れがわかりやすいように、 左端2マス分を赤線で区切り、問題 解決過程を書く。</p>	<p>まとめは赤で囲む。</p>

※ノートの例

4月9日 晴れ 22℃
ものどけろ

問題 水に食塩とかがすと、
... だろうか。

予想 ① 食塩は見えなくな。たので
... になったと思つ。
② さとうは、コービーにとけ
るので、食塩...
... になると思つ。

実験 ① 水 25 mL ...
② ...

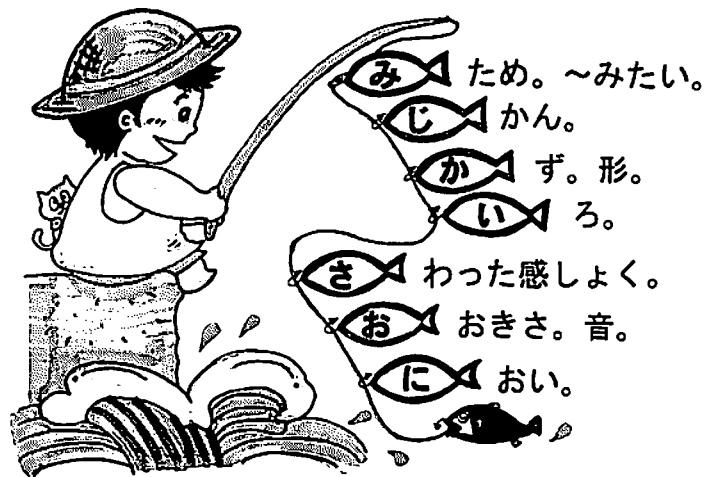
結果

	①
	②

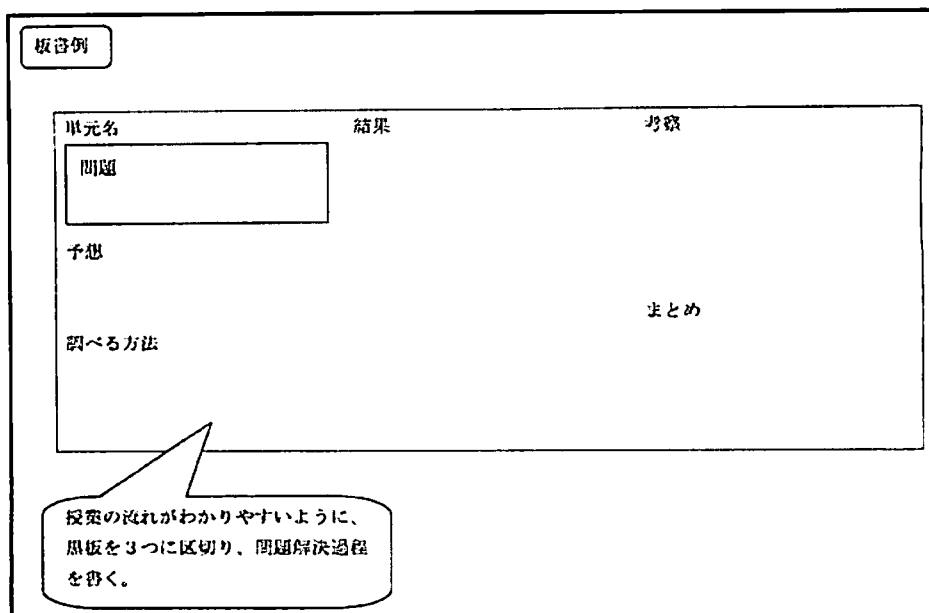
考察 結果から...
... ということがおわる。
① や ② を工夫して
使いまわす。

まとめ 水に溶けた...
...

③ 観察・実験・考察での視点を示し、その頭文字を「み・じ・か・い・さ・お・に」という合言葉にした。



④ 板書のしかたを統一し、予想や考察の文例を示した。



(2) 調査部

- ① 児童の意識調査、自然体験調査を行い、課題を明確にした。
- ② 標準学力検査の分析を行い、課題を明確にした。

(3) 環境部

- ① 理科室と廊下の掲示物を整備し、学習内容の系統性を示し、実験器具の使用法などを掲示した。
- ② 各階に観察・体験できる理科コーナーを設置した。
- ③ 樹木プレート・岩石園のネームプレートを設置した。



4 研究の成果と課題

(1) 成果

- ・ 指導方法の工夫・改善により、理科好きの児童が増え、さらに学力の向上が図れた。
- ・ 意識調査や、標準学力検査の分析の結果を生かして、補充問題に取り組ませるなどの工夫をすることにより、知識の定着化が図れた。
- ・ 事象提示や場の工夫等により、児童が問題を主体的に解決できるようになった。
- ・ 環境整備により、児童が理科に興味を持ち、主体的に活動するようになった。
- ・ 環境整備により、休み時間などにも児童は科学的な体験ができた。

(2) 課題

- ・ 予想や考察の場面での話し合い活動、表現活動により、言語能力の育成を図ってきたが、さらにその向上を図る。
- ・ 教材・教具、事象提示の工夫・改善を図り、児童の主体的な活動をより深める。
- ・ 指導方法の工夫により、理科の学習で学んだことの生活化を図る。

研究主題 「学ぶ喜び、笑顔輝く高北っ子の育成」

副題 ユニバーサルデザインの授業づくり 学校づくり 人づくり
～特別支援教育の視点を生かし、コミュニケーション能力を高める国語の授業づくり～
川越市立高階北小学校

研究のポイント

- 特別支援教育の視点を生かし、規律があり互いのよさを認め合える温かい学級づくり、授業づくりを実現することにより、生き生きと活動する児童の育成を図るようにする。
- 言語環境を整え、楽しく「わかる・できる」授業づくりを工夫し、他者との学びの共有を図ることにより、コミュニケーションの能力を高めることができるようにする。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

- ① 特別支援教育の視点を生かし、規律があり互いのよさを認め合える温かい学級づくり、授業づくりを実現することにより、生き生きと活動する児童を育成する。
- ② 言語環境を整え、楽しく「わかる・できる」授業づくりを工夫し、他者との学びの共有を図ることにより、コミュニケーションの能力を高めることができるようにする。

(2) 研究主題設定理由

① 研究主題について

平成23年4月、小学校新学習指導要領が全面実施され、子どもたちの現状を踏まえ、確かな学力、豊かな人間性、健やかな体といった知・徳・体のバランスのとれた力である「生きる力」をより一層育むことを目指している。(時代の要請)

また、本校は、川越市内で五番目に児童数の多い小学校である。他との関わりが上手な子もいれば苦手な子もいる。すべての子どもたちが、将来、「生きる力」を発揮して、人との望ましい関わり合いの中で幸せな人生を送ることができるように、国語科の授業を中心に、コミュニケーション能力を育てていきたいと考えた。(児童の実態～「笑顔輝く高北っ子の育成」)

② 副題について

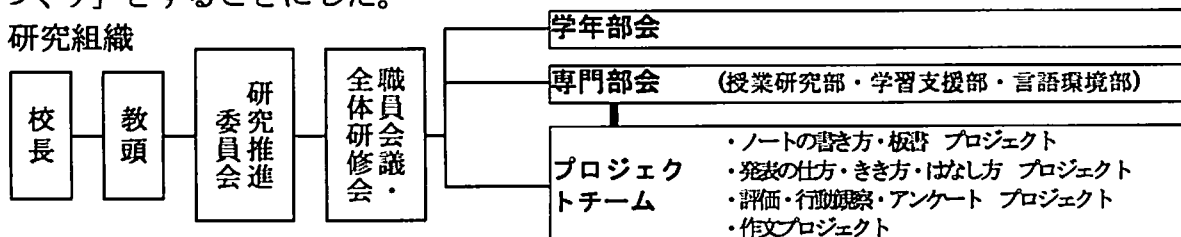
様々な課題を抱える児童を含め、すべての子どもたちが、楽しく、「わかる・できる」という実感を持てるような授業づくりは、本校に限らず多くの学校の課題である。

「ユニバーサルデザインの授業づくり」の推進は、一人一人の子どもたちが自己肯定感を持ち、「身も心も健やかに」育つ、「楽しい学校」づくり、「明るい学校」づくりにつながる。(ユニバーサルデザインの学校づくり)

また、すべての子どもたちが、将来、「生きる力」を発揮して、人との望ましい関わり合いの中で幸せな人生を送ることができるようにという、保護者、地域、教職員の強い願いともつながる。(ユニバーサルデザインの人づくり)

そこで、研究の副題を、「ユニバーサルデザインの授業づくり、学校づくり、人づくり」とすることにした。

(3) 研究組織



たかまる学び かんじる心 きたえる体

研究主題

学ぶ喜び、笑顔輝く高北っ子の育成

副題

ユニバーサルデザインの授業づくり 学校づくり 人づくり

学校教育目標の具現化

生き生きと活動する児童の育成

コミュニケーション能力の育成

規律

温かい学級・学校づくり

「わかる・できる」授業づくり

言語環境

学びの共有

仮説1

特別支援教育の視点を生かし、規律があり互いのよさを認め合える温かい学級づくり、授業づくりを実現することにより、生き生きと活動する児童の育成が図られるだろう。

仮説2

言語環境を整え、楽しく「わかる・できる」授業づくりを工夫し、他者との学びの共有を図れば、コミュニケーションの能力を高めることができるだろう。

特別支援教育の視点を生かして

生きる力

すべての子どもたちが、「生きる力」を発揮して人との望ましい関わり合いの中で幸せな人生を送ること

自己肯定感のアップ
(自分を好きになる)

自己解決力

考え、決め、練り上げる

協働 助け合い

人のために力をつくす
感謝される喜びがわかる
人に感謝の気持ちをもて

質の高い学び

人の考えを理解する
自分の考えと比べる
自分の考えを修正する
自分の考えをまとめる

コミュニケーション能力の向上

- ・人との対話を通して、相手の言い分を理解尊重する
- ・状況に応じて、自分で考え判断する
- ・相手の意見と何が同じで何が違うかを整理する
- ・折り合いがつけられる

自分や相手の気持ちの理解

表情・伝え合い 視線・支え合い
言葉・認め合い

・SST

(ソーシャルスキルトレーニング)

国語科・特別活動・道徳など
その他教育活動全般

わかる喜び

達成感 達成感

- ・わかりやすさの工夫
授業の構造化 スケジュール
1単位時間の流れ
めあての提示→評価
わかりやすい発問の工夫
視覚支援 板書の工夫
黒板の分割 ノート指導

言語力

理解力 表現力 語彙力

- ・言語環境の整備 読書の推進
わかる手立て(論理的作文・文ちゃん人形など)
- ・わかるできる授業
(国語授業のユニバーサルデザイン
Universal Design Learning)

安心できる学びの場

- ・話し合える人間関係
- ・失敗がゆるされる
- ・ルールがある
- ・ほめられる



*参考 桂聖 著「ユニバーサルデザインの授業づくり」

わかりやすい授業

高階北小のユニバーサルデザインの授業づくり

* 焦点化 (シンプルな授業)

- ・学習内容を精選して、身につけさせたい力を明確にします。
- ・1時間の授業の中で、最も大切な活動に時間をかけます。
- ・教材文の分析を行い、発問や指示をよりわかりやすく工夫します。

* 視覚化 (ビジュアルな授業)

- ・板書を構造化して、授業の流れが一目でわかるようにします。
- ・フォーマットを明確にした統一性のあるノート指導を行います。
- ・劇化や動作化を積極的に取り入れたり、学習形態を工夫したりします。

* 共有化 (分かち合う授業)

- ・授業の中に様々な対話の場面を設定します。
◇音声言語 文字言語 自己内対話
◇児童と児童 教師と児童 個々の児童
- ・対話を通して、子どもたち一人一人の評価と支援を行います。

3 実践事例

(1) 共有化

授業のユニバーサルデザイン化・コミュニケーション能力の育成を図る。

・指導案

- 「個別への配慮」欄の設定。
- 「コミュニケーション能力を育てるための指導」の明記。

- ・学習形態・個に応じた指導の工夫
ペア学習 グループ学習



(2) 焦点化・視覚化

授業の流れや見通しが持てるように板書の工夫を図る。

仕切り線（黒板分割磁石）

まとめの書き出しの文を「めあて」確認後に提示することで、学習の見通しを持つことができる。

終末

展開

導入

(3) スマイル教室（個別の支援教室）の取組

特別支援教育の視点を生かし

わかるって 楽しいな

スマイル教室では、個別の支援が必要であり、週2回～数回程度の個別の支援が有効と思われる児童に対し、保護者の同意を得て、週2回～数回程度の個別の指導を実施している。



【支援の内容】

- ・国語、算数を中心に個々のつまずきを発見し、スモールステップでわからないことをわかるようにする。
- ・SSTにより対人関係のつまずきを改善する。

- ・がんばれば「できる」課題を設定することで、「できた」喜びとほめ言葉のシャワーによる成就感を味わわせることができる。
- ・悩みや不安に寄り添ってもらえる安心感や、いつも見ていてくれるという安心感が、やる気や元気を生み出す。

多面にわたりプラスの効果を生み出す。

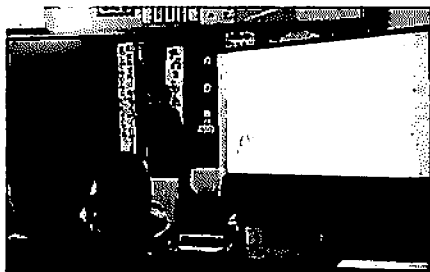
例えば

- ・学習がわかるようになり、自信がついた。
- ・集中力がアップし、行動が落ち着いた。

自己肯定感のアップ

4 研究の成果と課題

教員は、特別支援教育の視点を生かし、ユニバーサルデザインを意識した授業づくりを行うようになった。その結果、学校全体が落ち着きを見せ、集団適応が苦手な児童をはじめ、様々な課題を抱える児童が、生き生きと活動するようになった。また、教員の児童理解も、児童は何をどう困っているのだろうという児童の立場に立った見方に変化



した。その結果、学校の教育活動に対する保護者の理解も深まった。

今後は、学校のすべての教育活動にユニバーサルデザインの考え方を取り入れ、計画的・継続的な指導の充実を図るとともに、地域や家庭との一層の連携を図りながら、継続してコミュニケーション能力の育成を目指したい。

(1) 研究の成果

- ① 児童に対する理解が教師側の視点ではなく、児童が何をどう困っているのだろうかという児童の立場に立った見方になった。
- ② 教師が特別支援教育の考え方に立ち、ユニバーサルデザインを意識して教育実践を行うことができた。
 - ・ 安心できる学びの場を確保し、温かい学級・学校づくり、授業づくりを心がけ実践することができた。
 - ・ どの子にも分かりやすい学習環境や発問・指示、授業の構成や課題が明確にされた授業等、ユニバーサルデザインを意識した教育実践を行うことができた。
 - ・ 相手の気持ちや考えを受け入れ、また、自分の気持ちや考えを伝える(コミュニケーション能力の育成)という活動を大切にされた教育実践を心がけることができた。
- ③ 「国語の授業から広がる」とした本研究は、全職員挙げての算数の教材作りや夏季算数教室へと広がりを見せた。
- ④ スマイル教室(個別の支援教室)や算数教室の実践などにより個別指導と一斉指導の両輪の指導を実現した。また、学校の教育活動への保護者の理解が深まった。
- ⑤ 学校全体が落ち着きを見せ、集団適応が苦手な児童をはじめ、様々な課題を抱える児童に生き生きと活動する姿が見られるようになった。

(2) 今後の課題

- ① すべての教育活動の中にユニバーサルデザインの指導を取り入れることで、計画的・継続的な指導の充実を図っていく必要がある。
- ② あいさつなど、応答し合う力が身についていない児童も見受けられるので、地域や家庭との連携を図りながら、継続してコミュニケーション能力の育成を目指していく必要がある。

コミュニケーション能力の育成を目指して!

① 教室内でのあいさつをしっかりと目指す。

② 子どもの話をよく聞いてあげる。

③ 地域単位で子どもを育てる。

PTA広報「さざなみ」

研究主題

「お互いを尊重し合い、共に高め合うことができる児童の育成」

～人とのかかわりを大切にしたい人権教育の推進～

川越市立寺尾小学校

研究のポイント

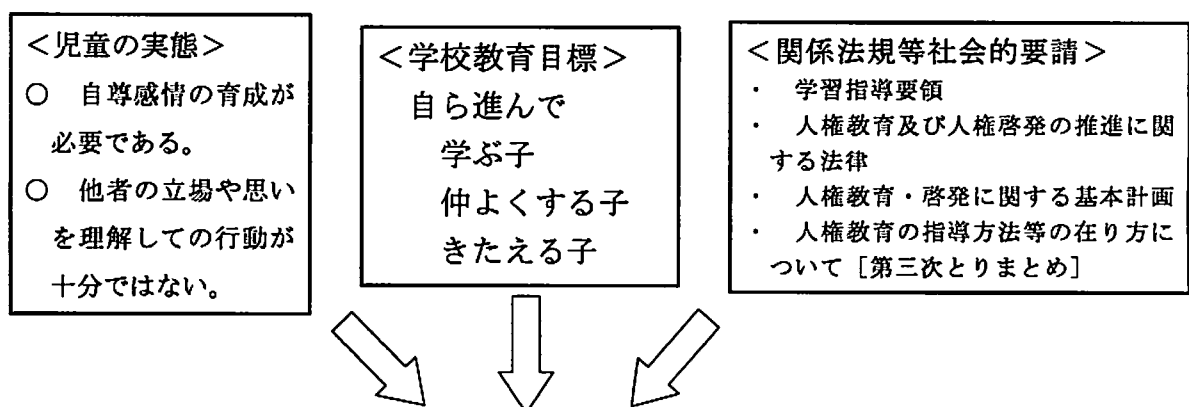
- お互いを尊重し合い、共に高め合うことができる児童の育成のために、具体的な「目指す児童像」を設定し、「仮説」「手立て」を設定して取り組んだ。
- 道徳・学級活動・生活科等を中心に、全教育活動を通して、人権教育に取り組んだ。
- 家庭や地域と連携し、様々な体験活動を取り入れた取り組みを行った。

1 研究の概要

(1) 人権教育に関する目標

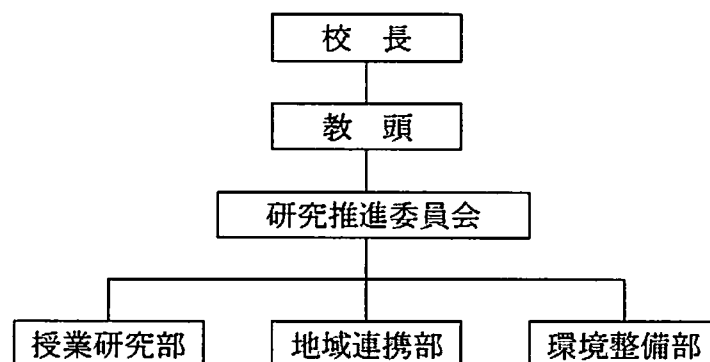
人権についての正しい理解を深め、様々な人権問題を解決しようとする児童を育成する。

(2) 研究主題設定理由



研究主題 お互いを尊重し合い、共に高め合うことができる児童の育成
～人とのかかわりを大切にしたい人権教育の推進～

(3) 研究組織



2 研究の内容

(1) 授業研究部の取組

研究主題にせまるために、「授業における3つの留意事項」と仮説を検証するための具体的な手立てを設定した。

① 「授業における3つの留意事項」

- ・人権教育上のねらい
- ・人権教育上の視点
- ・人権教育上の配慮

② 仮説と手立て

仮説1 「伝え合う授業」

手立て

- ア 発達段階に応じた話合いの形式を全校で統一する。
- イ 聞き方、話し方の指導を全教科の中で行う。
- ウ 自分の思いや考えを安心して発表できる場の設定や支援を工夫する。
- エ 友達の意見と自分の意見とを比較しながら聞き、立場の違いやその意見のよさに気付けるよう支援する。
- オ 上手に意見を伝えられた児童を称賛し、また、お互いに称賛するよう指導する。

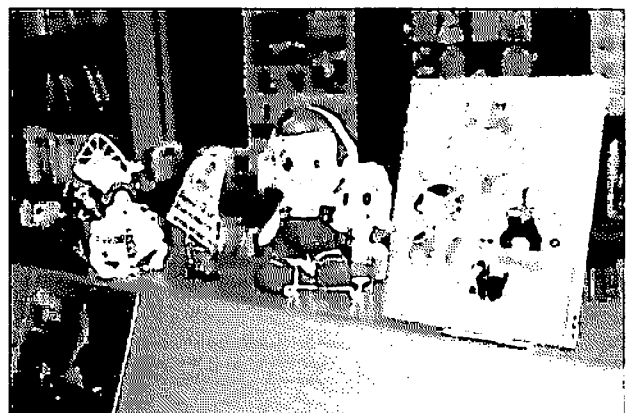
仮説2 「認め合う授業」

手立て

- ア 多様な集団決定の経験を積み重ねる。
- イ 友達の考えをとらえるための工夫を取り入れる。
- ウ 友達のよい所を認め、伝え合う場を設定する。
- エ 補助発問を活用し、多様な考え方に触れさせることにより、互いの意見のよい所に気付くことができるようにする。
- オ 子どもにとって身近な資料を選定する。
- カ 子どもにとって魅力的な活動を設定する。
- キ 一人一人を認める機会を設定する。



<多様な集団決定の経験>



<心を豊かにする読書活動>

仮説3 「ふれ合う体験」

手立て

- ア 話し合い活動で集団決定したことをみんなで協力して実行する。
- イ 活動を振り返り、良かったことを認める時間を持つことにより、実践意欲を高める。
- ウ 自己決定した内容を実践し、後日振り返り、修正しながら継続できるようにする。
- エ 心を豊かにする読書指導を、全校で一貫して推進する。
- オ 人的、物的な面から、読書環境を整える。
- カ 身近な人との交流を通して、実践意欲を高める。
- キ 多様な体験活動を推進する。

(2) 地域連携部の取組

地域の教育力を一層推進するために、地域との連携の強化を図った。

① 「おらが寺尾の応援団」一覧表の作成

学校に協力してくださる地域の方、保護者の皆様を、学年の単元や行事に対応させた一覧表を作成した。

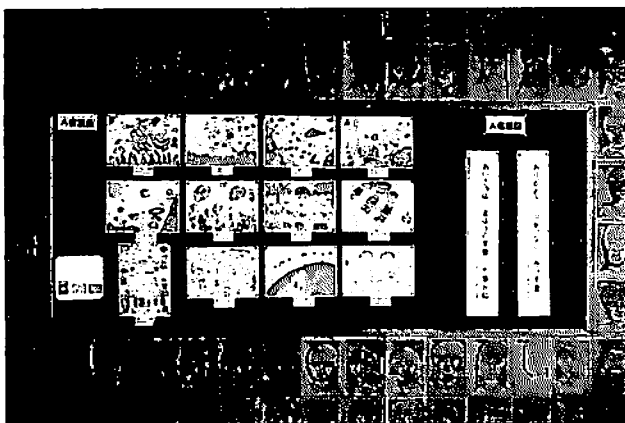
② 応援団の活躍の紹介

応援団の活躍の様子を紹介する掲示板を作成し、校内に掲示した。

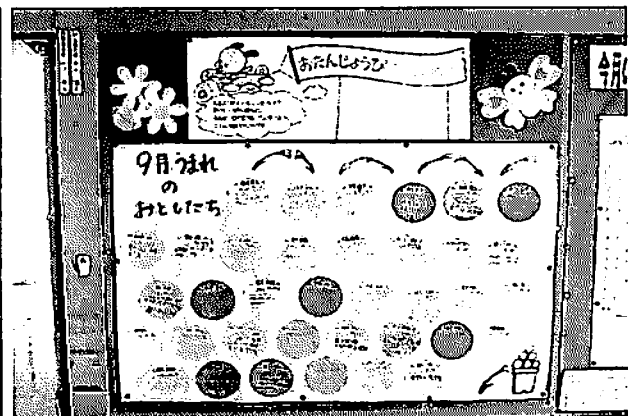
(3) 環境整備部の取組

① 人権意識の高揚に向けた環境づくり

人権コーナーの設置や人権標語の掲示、友達のよい所の紹介など、児童の人権意識高揚に向けての掲示物などを、作成・掲示した。



<人権コーナー>



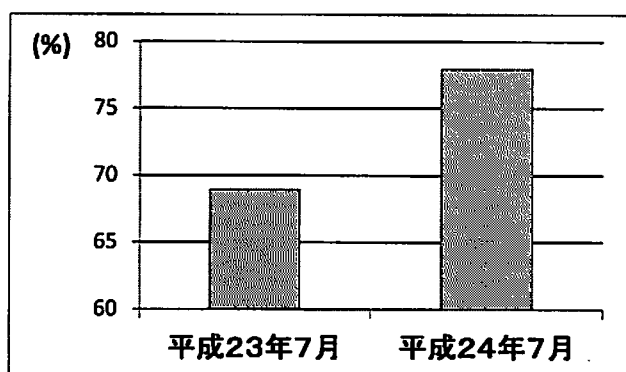
<友達のよい所の紹介>

② 各種調査やアンケートの実施と分析

3 実践による効果

各種調査の分析から、以下の事項に効果があったと考えられる。

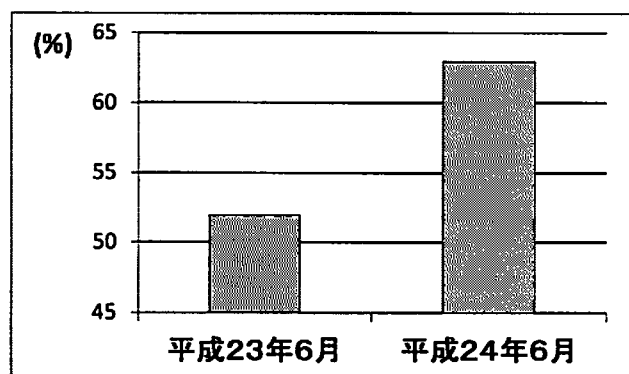
- (1) 「学校生活が楽しい」と答えた児童のうち、「友達と遊ぶことが楽しい」と答えた児童の割合



校内で作成・実施している「学校生活を楽しくするためのアンケート」の結果を用いて、平成23年7月の1～5年生と平成24年2～6年生の変容を分析した。

友達と共に学校生活を送ることが楽しいと感じている児童が増えてきたことが分かる。

- (2) 「クラスの人とは声をかけたり親切にしたりしてくれますか」という質問で「あてはまる」と答えた児童の割合



毎年1学期に実施しているQ-U（図書文化社）の結果を用いて、平成23年度5年生と平成24年度6年生の変容を分析した。

この結果から、10.8ポイント上昇し、友達との関わりによい面での変容が見られる。

4 研究の成果と課題

(1) 成果

- 一人一人の児童のよい点に着目し、お互いを認め合う場面を多く設定することにより、望ましい人間関係が築けるようになった。
- 話し合い活動を取り入れた授業を展開することにより、相手の意見をしっかり聞いた上で、自分の考えを相手に伝える態度が身に付いてきた。
- 全教育活動を人権教育の視点から見直すことにより、全ての教職員が人権教育の重要性を一層強く認識し、進んで実践しようという意識を高め、児童への指導につながることができた。

(2) 課題

- 人権意識を高めるために、児童が学んだことを実践する場を意図的に設定することが必要である。
- 家庭や地域の方に幅広く情報を提供し、より多くの方が参加して関わりを持てる行事等を実施することで、地域全体の人権意識の高揚を図っていくことが必要である。
- 研究成果を踏まえ、「手立ての精選」「評価の確立」等、一層効果的な指導の在り方について検討することが必要である。

研究主題

「人とのかかわりを大切にし、主体的に活動できる児童の育成」 ～言語活動の充実を目指して～

川越市立川越小学校

研究のポイント

- 国語の授業で身につけたことを他教科・領域に広げ、子ども同士の関わりを大切に「伝え合う」コミュニケーション能力の育成を目指す。
- 教師の創意工夫を引き出していくために、プロジェクトチームを再編し、リーダーを中心に主体的な実践研究を進める

1 研究の概要

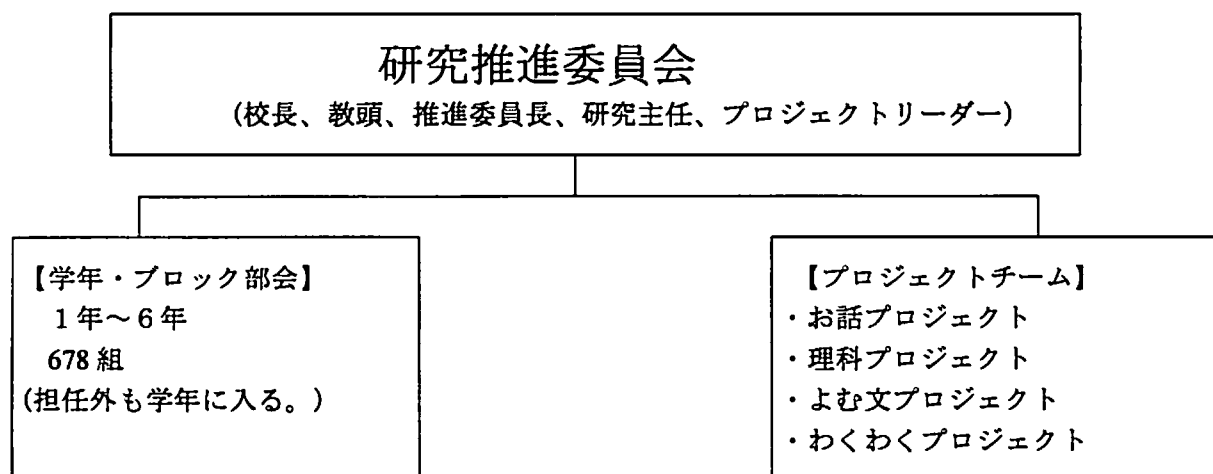
(1) 研究のねらい

昨年度までの国語科研究を継続しながら、国語の学習で身につけた言語感覚を、日々の生活や他教科・領域の中で活かしていけるようにしていく。とくに、理科の力を高めるために「言語活動の充実」を目指していく中で科学的な見方や考え方を養っていく。

(2) 研究主題設定の理由

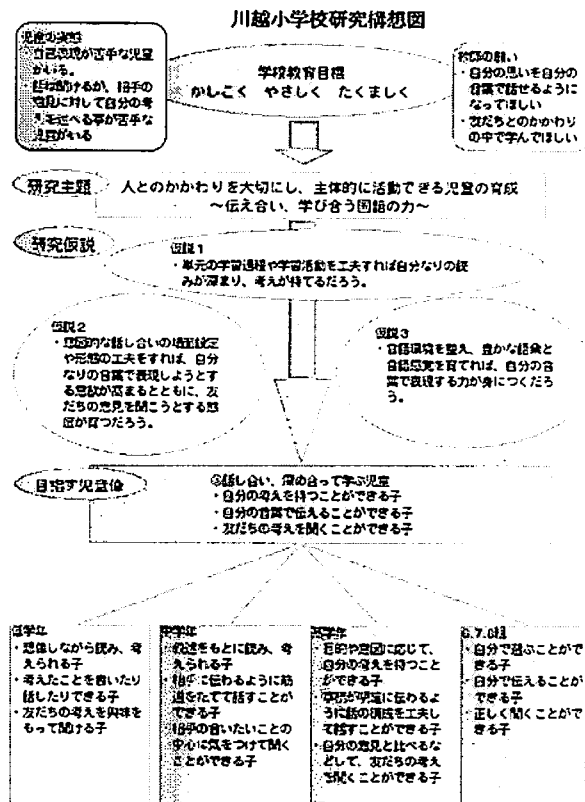
研究を始めた平成22年度当初の本校の児童の実態、そして課題は、日々の授業、学校生活の様子から自己表現が苦手、自分の言葉でうまく表現することができないということがあげられていた。このようなことから平成22年度・23年度、国語科を中心に研究を進めてきた。国語の授業の中で「情報の取り出し→解釈→話し合い→まとめ・評価」や「意見交流」などの授業スタイルを定着させることができた。また、プロジェクトチームを中心に児童の言語感覚を磨く取組も実践してきた。2年間の研究は国語の授業改善だけでなく各プロジェクトとしても着実な成果を得ることができ、学校全体としても向上してきた。そして、さらに国語以外の力も高めなければということから、これらの取り組みの成果を他教科・領域でも生かしていくことを主眼に本テーマを設定し、特に理科の授業研究にも取り組むこととした。

(3) 研究組織



2 研究の内容

昨年度までの研究については、右図のような構想で取り組んできた。国語科授業研究では「読むこと」を中心にすえ研究をしてきた。また、言語環境を整えるためには「3つのたがやし(音読・読書・視写)」に取り組んできた。話し合いのスキルを高める「お話し道場」の充実に取り組んできた。これを基本として活かしながら本年度は、下記のような仮説を設定し、検証していけば「言語活動の充実」を他教科・他領域にも広げていくことができると考えた。また、特に児童の実態から理科の力を高めていくことを視点に入れた。



仮説 1

理科の授業を改善し、学習過程を工夫することによって主体的に思考する児童が育つであろう

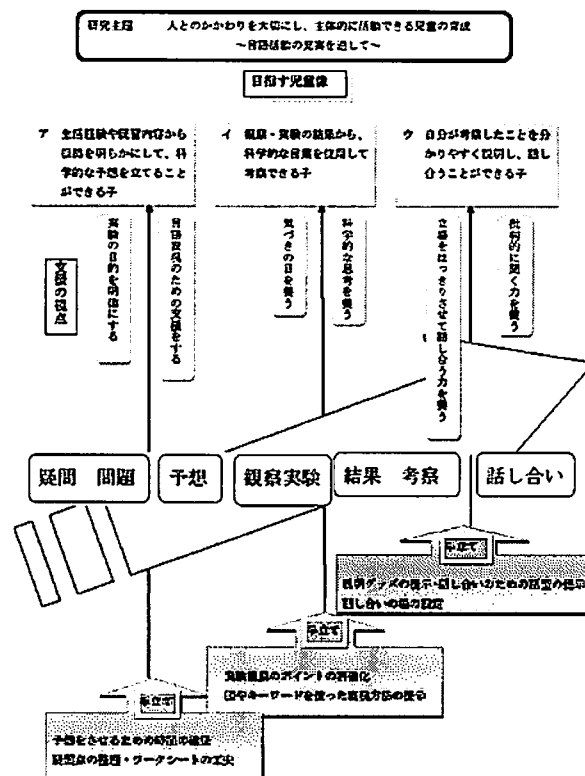
仮説 2

批判的に話し合う機会を増やすことによってお互いの考えを深め、学び合う児童が育つであろう

仮説 3

国語科の授業をベースにした言語力の育成を図ることによって、自分の言葉で表現できる児童が育つであろう

そして、仮説1に関しては①理科のねらいと各単元で身につけさせたい力の明確化②理科の授業研究と充実と改善に努める。仮説2に対しては、①各教科で身につけた知識・技術を活用する学習活動(言語活動)の充実②各教科毎の目指す児童像の設定③学年の発達段階に合わせた評価規準の作成を進める。仮説3に関しては、①国語科の授業の中で、記録、要約、説明、論述、発表、討論、批評、比較、話し合いに必要な言語力を育てる単元の洗い出しと各学年の発達段階に合わせた指導法の改善に取り組む。上図は、理科の学習と研究主題との相関図である。



上図は、理科の学習と研究主題との相関図である。

3 実践事例

各プロジェクトの取り組みの具体的な内容は、次のようになる。

○お話プロジェクト

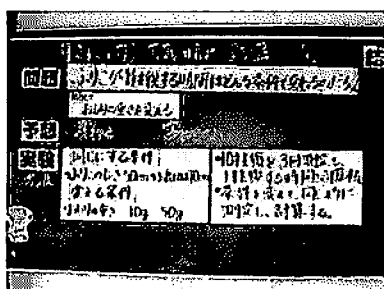
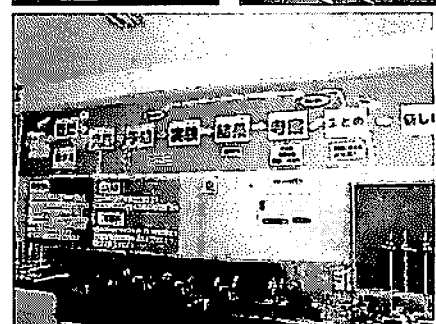
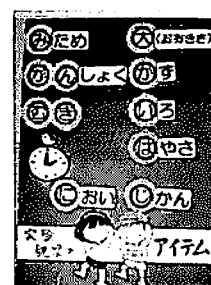
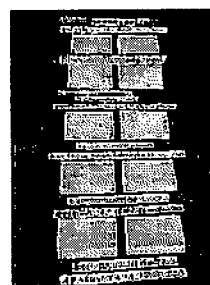
日常生活の中で、「話す聞く力」を高めていくことが活動の中心である。各学年の発達段階を考え、対話のスキルアップを図るために「お話道場」に取り組んできている。昨年度は、月1回月曜日の昼休みに実施していたが、1年間の反省を踏まえ、今年度は、さらに「お話道場」の活性化と定着を図るために月1回の水曜日の朝自習の時間に設定した。また、異動してきた職員にも第1回目を公開して実施内容や方法の共通理解を図った。話すテーマは、その時期にあったテーマで進めるようにした。



(お話道場)

○理科プロジェクト

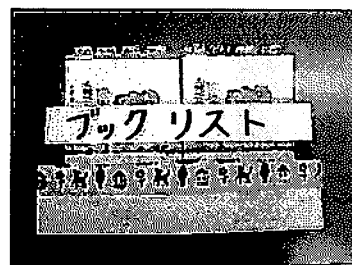
理科の学習を効果的に進めていくための環境整備や学習の進め方についての基本的事項を確認し、全職員の共通理解を図っていく。主な活動として①壁面掲示②ノートづくり③理科室のきまり④学習のアイテム⑤黒板の使い方⑥話し合いの進め方等について取り組む。①の壁面掲示については、学習した単元の内容を模造紙にまとめて、今までの学習がふりかえられるようにした。また、児童たちに他学年がどんな理科学習をしているのかを知らせていく効果もある。②のノートづくりについては、基本的なノート指導を共通化することによりどの学級も同じスタイルになり、クラス替えがあっても混乱が生じないようにした。③の理科室のきまりについては、背面黒板に学習の流れや理科室のきまり等の掲示物を作成した。④の学習のアイテムについては、実験や観察の視点（時間、はやさ、におい、大きさ、方向、みため、数、色、さわった感触）を[みかんむき大かいはいにじ]の語呂合わせにして理科室に掲示した。⑤の黒板の使い方についても、共通化を進めた。⑥の話し合いの進め方については、話し合いの役割分担を明確にするためプレートを作成し、裏側に進



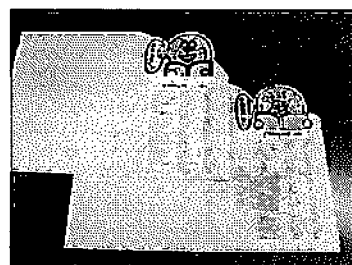
め方や立場が分かるようにポイントを示した。また、理科の学習単位の中で言語活動を意識して学習を進められるように「言語活動洗い出しシート」を全職員で作成していった。

○よむ文プロジェクト

昨年度までの「文ぶんプロジェクト」と「よむ読むプロジェクト」を統合して、定着してきた内容を継続的に取り組む。活動の柱は、①視写の充実②読書の推進③音読朝会の工夫・改善である。視写の充実では、「文ぶんタイム」を昨年度は、月2回であったものを毎週水曜日の10分間にして年間19回の取り組みにした。習慣化させていくことにより、書く事への抵抗をなくし、正確に早く書き写す力を育てるようにした。読書の推進では、「家読書」を家庭と連携して継続的に取り組んでいくとともに、「本の森30選(低学年用・高学年用)」やブックリスト(高学年)を充実させていく。音読朝会では、学期1回の取り組みと学校公開日に向けた学年別音読発表会を充実させていく。とくに、音読発表会は2年目を迎え、児童も発表会の様子が分かるようになり各学年の発表が充実した。また、保護者や地域の方からは、楽しみにしているだけでなく児童の表現力や学年の国語力に対して厚い賞賛や信頼をいただいている。



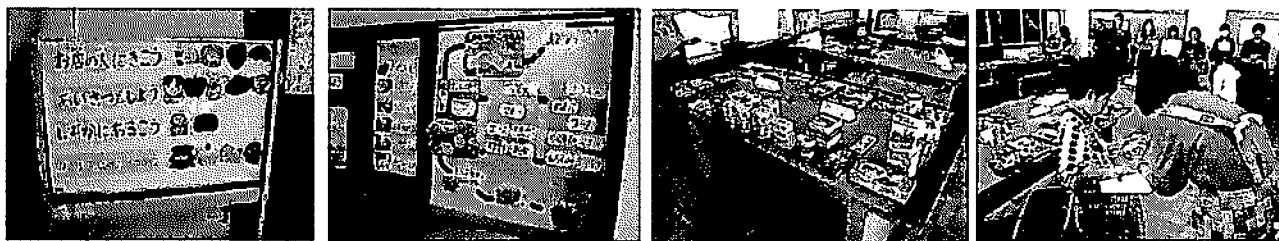
(ブックリスト)



(本の森30選)

○わくわくプロジェクト

障害のある子どもたちが、より豊かに生活するためにコミュニケーション能力が高められる場や方法を考えることに取り組んでいる。



4 今後の成果と課題

(1) 成果

- ・ 国語の学習については、川越小のスタイル(情報の取り出しを基本とする)が確立し、児童が根拠を明らかにした読みが進められるようになってきた。
- ・ お話道場の成果が現れてきて、話し合いの進め方がスムーズにできるようになった。
- ・ 昨年度までのプロジェクトを再編したが、取り組み内容を継続している内容については充実させることができ、児童にも定着してきた。
- ・ 理科プロジェクトが理科の学習環境を整備し、理科学研究の基礎ができた。

(2) 課題

これまでの読みの学習、本年度は説明的な単元についての取り組みを深めてきているところであり、さらに指導を充実させていく。また、理科の学習については研究を重ね、国語研究の成果を生かしながら来年度に向けて一層深めていきたい。

研究主題

「自ら問題を見だし、わかる喜びを味わえる児童の育成」 ～実感を伴った理解を深める理科・生活科・生活単元の指導の工夫～

川越市立中央小学校

研究のポイント

—実感を伴った理解を深める—

- 目的意識をもった観察や実験、科学的な体験、自然体験などの具体的な活動を多く取り入れ、自然の事物・現象に対する楽しさを味わうことのできる児童の育成に取り組む。
- 自ら問題を見だし、解決しようとする児童の育成に向けて、事物・現象の提示を工夫したり、多様な学習形態を取り入れたたりして、授業改善を図る。
- 体験活動ができる環境を整え、生活と結びついた授業展開をしていくことで、実生活とのつながりを意識できる児童を育成する。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

「実感を伴った理解を深める」ことを研究の大きなねらいとしている。本校は今年度より、理科・生活科・生活単元の研究に取り組んでいる。次の(2)に記した本校の実態から、まず自然の事物・事象に対して興味・関心をもたせていくために、具体的な体験活動や生活との結びつきを意識させるなど、実感を伴った理解を深めていけるような授業改善、環境整備の工夫を図る。

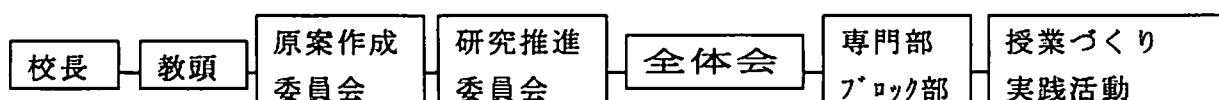
(2) 研究主題設定理由

近年の学校教育においては理科学力の低下が顕著になっており、平成20年度学習指導要領改訂では、「理数教育の充実」が重点として示された。

本校は市街地に立地しており、日々の生活の中で自然に触れる機会が少なく、体験等を通して実感を伴った理解を深めることが難しい。また、標準学力検査の理科の結果においては、偏差値が52～55と他教科の偏差値54～56に対して低い実態もある。

そこで、研究主題を「自ら問題を見だし、わかる喜びを味わえる児童の育成」副題を「実感を伴った理解を深める理科・生活科・生活単元の指導の工夫」として、児童の自然科学に対する興味・関心を高めるような体験的な学習を取り入れた指導の在り方や環境整備を進め、実感を伴った理解を深め、わかる喜びを味わえる児童を育成していきたいと考え、本研究主題を設定した。

(3) 研究組織



2 研究の内容

(1) 研究の主な手立て

「自ら問題を見だし、わかる喜びを味わえる児童の育成」
～実感を伴った理解を深める理科・生活科・生活単元の指導の工夫～

目指す児童像

- ・ 自然の事物・現象に興味をもち、楽しさを味わえることのできる児童
- ・ 自ら問題を見だし、解決しようとする児童
- ・ 実生活とのつながりを意識することができる児童

【仮説1】 目的意識をもった観察や実験、科学的な体験、自然体験など具体的な活動を多く取り入れることで自然の事物・事象に対する楽しさを味わうことのできる児童が育つであろう。

【仮説2】 事物・現象の提示を工夫し、多様な学習形態を取り入れることにより、自ら問題を見だし、解決しようとする児童が育つであろう。

【仮説3】 具体的な体験を取り入れたり、生活との結びつた授業を展開したりすることにより、実生活とのつながりを意識することができる児童が育つであろう。

【仮説1】 についての手立て

- ・ 単元及び本時の導入時に、体験活動を多く取り入れていくようにする。
- ・ 一人一人が活動に積極的に関わることができるよう、観察や実験時にはできるだけ多くの実験器具や具体物を準備する。

【仮説2】 についての手立て

- ・ 1単位時間、1単元における授業の流れの確立と共通理解を図る。
- ・ グループでの活動を積極的に取り入れていく。
- ・ 多様な指導、支援、評価の方法を行う。

【仮説3】 についての手立て

- ・ 児童の興味・関心を高めていくことができるような環境整備を進める。
- ・ 観察や実験時には、実生活との結びつきを意識させていくために、身近な素材を取り上げるようにする。

(2) 研究授業の実施

- | | | |
|----------|------|-------------------|
| ① 第2学年 | 生活科 | 「みんなでつくろうフェスティバル」 |
| ② 第3学年 | 理科 | 「電気で明かりをつけよう」 |
| ③ 第6学年 | 理科 | 「水溶液の性質」 |
| ④ 特別支援学級 | 生活単元 | 「花の子まつりをしよう」 |

(3) ご講話・講演会

- | | | |
|----------------|-------|----|
| ・ 川越市立教育センター主査 | 大澤由美子 | 先生 |
| ・ 川越市立霞ヶ関小学校長 | 山田直樹 | 先生 |
| ・ 所沢市立上新井小学校長 | 高橋等 | 先生 |
| ・ 川越市立上戸小学校長 | 宮崎洋子 | 先生 |

3 実践事例

(1) 授業研究部

- ① 授業実践に向けて、研究主題をもとに用語の捉え方、基本的な考え方等共通理解を図る。

ア 「自然に親しむ」

自然の事物、現象に興味をもち、自ら関わっていくこと。

イ 「見通しをもって観察・実験を行う」

- ・ 予想を立て、観察・実験を計画・実施し、その結果から「なぜそうなるのか」を自ら考えるようにすること。
- ・ 児童が意図的に働きかける活動であり、その後の思考や活動に大きな影響を与える。

ウ 「問題解決能力を育てる」

- ・ 第1学年及び第2学年：自分自身や自分の生活について考える能力
- ・ 第3学年：比較する能力
- ・ 第4学年：関係付ける能力
- ・ 第5学年：条件制御の能力
- ・ 第6学年：推論する能力

- ② 研究仮説を受けて、授業実践における重点を作成する。

- ③ 授業実践における指導の視点を明確にする。

- ④ 授業実践における1時間の流れを確立する。

ア 課題：授業を通して何を明らかにしたいのかを明確にする。

イ 予想：既習した知識や体験をもとに結果を考えさせる。

ウ 観察・実験：〇〇を明らかにするためには、どのような方法が考えられるか、どのような方法がよいかを考えさせる。

エ 結果：観察・実験の結果を自分の言葉で、わかりやすく記録する。

オ 考察：結果から何が言えるか、結果からわかったことを考えさせる。

カ まとめ：結果から得た知識や情報を共有させる。



展開の揭示：各学級分作成

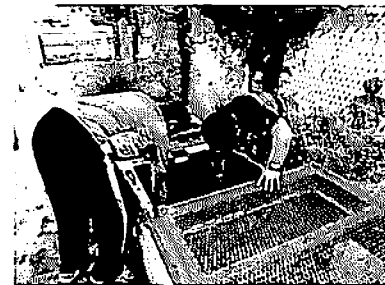
(2) 環境整備調査部

- ① 樹木プレートの作成

校内の樹木から、約30種類以上の樹木（50本）を選定した。プレートは樹木の名称を問う「クイズ」を1枚目に表示し、それをめくると2枚目に「樹木の名称」の答えが書いてあるようなデザインにした。

- ② 外水槽の整備

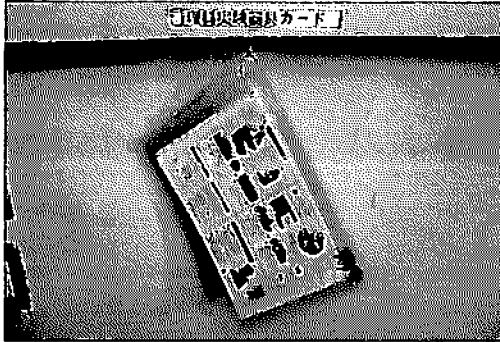
長年放置され、使用されていなかった理科室前にある段型外水槽についての活用を検討し、2カ年計画で整備していくことにした。職員だけでなく、PTAの力も借りながら事業を進めている。



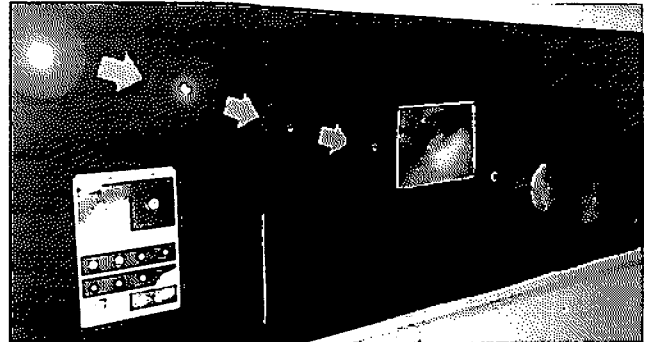
③ 理科分野にかかわる本校児童の実態調査の実施・分析

研究を進めるにあたって、自然科学に関わる興味・関心を問うものを中心に、生活科用（低学年）、理科用（中高学年）の2種類のアンケートを準備し、全児童を対象に調査を行った。理科や生活科の授業や実験・観察が「好き」と回答する児童が多い反面、動植物に対する関心が低いことが明らかになった。

④ 理科室等校内の整備



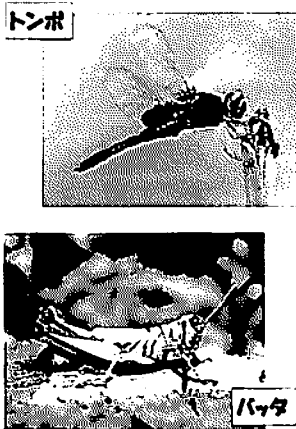
器具の使用方法の手順を作成



理科室前掲示：金環日食の様子

発見者カード

発見者カード



季節ごとに変わるパネル

見つけた!カード

各員と同じ生きもの（植物など）を見つけた人は、下の表に書いてください。

発見者の氏名	年 月 日	
見つけたものの名前（生きもの、植物などの名前）	見つけた場所	見つけた日時
見つけたときの様子、くわしくおしえてください。感想でもいいですよ。	(注) 色、筆、入墨、にぎりばし、筆記用具は必ず持参してください。	

よく見つけたて賞

あなたは、自分の力で、この

を見つける（発見する）ことができました

よってその活躍をたたえ、これを表彰します

平成 年 月 日
川越市立中央小学校長 加藤 伸二

あなたへのメッセージ

↑昇降口図鑑パネル
→見つけた!カード

すべて書けた人は、校長室に行き、ドアのポストに入れてください！
うらには、発見者からのメッセージがもらえるよ！

4 研究の成果と課題

(1) 成果

- ・ 実験器具を増やすなど、一人一人の活動場面を増やしたことで実験・観察など主体的に取り組む児童が増えてきた。
- ・ ペアやグループ学習など取り入れたことで、問題に対して進んで解決しようとする児童の姿が多くなった。
- ・ 校地内の環境整備を進めたことにより、身近な自然に触れる機会が増えた。

(2) 課題

- ・ 効果的な問題の提示や学習形態についてさらに研究を深めていきたい。
- ・ 具体物があることで、児童の関心・意欲は高まる。教材・教具の開発をさらに進めるとともに、環境整備の充実を図っていきたい。

「仲間と支え合い、躍動する仙波っ子の育成」

川越市立仙波小学校

研究のポイント

- 仲間と見合い、励まし合い、教え合い、認め合うという「支え合い」の中で、技能・体力・保健的実践力の高まった「躍動する」児童の育成を図る。
- 児童の興味・関心を抱かせる運動、成功体験の積み重ねによる自信の獲得、安全能力の習得、身体支配の操作能力習得による体力の向上、美しさの追求による児童の心的成長、仲間との見合い・教え合いという視点から、器械運動を重点領域として研究を行う。
- 体育科授業、運動生活化、保健的側面、環境整備の面から研究主題に迫る。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

- ① 児童相互で支え合って学習を進める、児童の「学び方」の育成を図る。
- ② 技能・体力・保健的実践力の高まった「躍動する」児童の育成を図る。
 - ア 丈夫な体を持つ。
 - イ 運動欲求を満たす。
 - ウ 知的欲求を満たす。
 - エ 児童の基礎・基本の習得を保証する。
 - オ 仲間・教師との好ましい関係を築く。

(2) 研究主題設定理由

本校児童の体力については、新体力テストの面から考察するとこの数年間、低下傾向及び低い状態が続いている。平成23年度においては、男子は全項目48項目中5項目、女子は48項目中4項目しか県平均値を上回っていない。また、児童の体力ランクについても男子はAが5.8%、Bは23.8%、女子はAが7.3%、Bが24.1%と、県が掲げるA、Bランク合わせて50%という目標に遠く及ばない。

遊ぶ時間がない、遊ぶ空間がない、遊ぶ仲間がいないという「3間がない」ということが数年前から盛んに言われているが、本校はまさにその状態にある。川越駅近くの学区は、広い公園がないだけでなく、習い事にも困らない状況で、当然児童から外遊びを奪い、忙しい毎日を送らせている。加えて本校運動場も大変狭く、全児童が校庭に出て遊ぶと安全性が危ぶまれるという状態である。

また、運動が好きな児童とそうでない児童の「運動の二極化」が見られるだけでなく、特定の運動だけ行う「局化現象」も顕著である。社会体育としてドッジボール、サッカー、野球、ドッジボール等が盛んであるが、「3間がない」ということとも重なって、局化を生み出している。特定の運動技能は高いが、マットで前転や後転が正確にできないという児童も見られる。

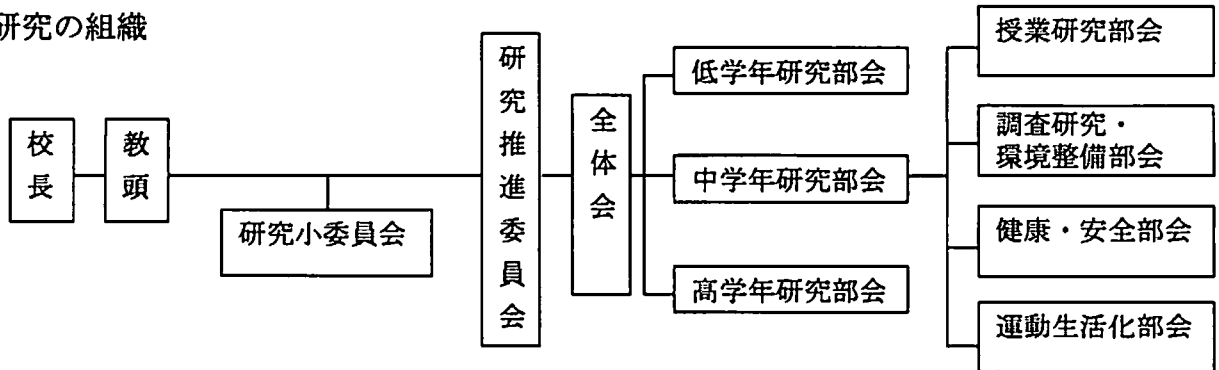
児童のけがについても多く、年間の保健室の来室児童数は延べ4000人を超える。けがの状況については、「転んで手が出なかった」「ボールがとんで来て手で防げなかった」などの運動神経系の未発達によるけがが少なくない。

さらに、遅い就寝・起床時刻やメディア漬けの生活等の生活習慣が乱れている児童や、ストレス・不安を抱えている児童もいる。生涯を通じて自らの健康を適切に管理

し改善していく資質や能力の基礎を培うために、健康の大切さを認識し、健康なライフスタイルを確立するための学習が必要である。

以上の実態を踏まえ、児童相互の関わり合いの中で、児童の技能・体力を確実に高めていくこと、保健的実践力を身に付けさせていくことが急務であり、「仲間と支え合い、躍動する仙波っ子の育成」という研究主題を設定した。

(3) 研究の組織



2 研究の内容

学校教育目標
思いやりのある子 よく考える子 たくましい子

研究主題

「仲間と支え合い、躍動する仙波っ子の育成」

目指す児童像

- (低)「誰とでも仲良く運動する子」「めあてを持って運動し、基礎的な動きを身に付ける子」
- (中)「友達と協力し、励まし合う子」「自分の力に合った運動を行い、基本的な技能を身に付ける子」
- (高)「友達と認め合い、喜びを共有できる子」「友達のよいところを見て学び、自ら技能を高められる子」

仮説1

6年間で系統的に指導をしていくとともに、児童の課題に合った練習方法を適切に与えていくことができれば、児童は生き生きと運動に取り組み、技能や体力を高めることができるであろう。

手立て

- ①学校全体で共有するスモールステップ及びつますきに応じた練習を明示した技の練習カードの作成
- ②技の系統表の作成及びそれに基づいた指導
- ③学び方（関心意欲態度や思考判断）の系統性の明示
- ④運動の特性を味わわせるような学習過程の工夫
- ⑤教師の器械運動理論・実技研修
- ⑥年間指導計画の改善

仮説2

体力や健康、安全について関心を持たせ、自ら運動に取り組んだり生活習慣を改善したりするように環境の整備、充実した指導を行えば、児童は心身ともに健康な生活を送ることができるであろう。

手立て

- ①休み時間の遊具の自主的な取組
- ②運動委員会による休み時間鉄棒教室
- ③学期に1回、1週間の生活習慣調査の実施、児童の健康の意識化に向けた取組
- ④体力向上通信の発行
- ⑤体力貯金カード ⑥保健学習教具の開発
- ⑦賛談教諭とのTTによる保健学習・保健指導

仮説3

仲間との豊かな関わり合いの中で、励まし合い、教え合い、支え合って運動に取り組ませることができれば、児童は心から運動を楽しむことができるであろう。

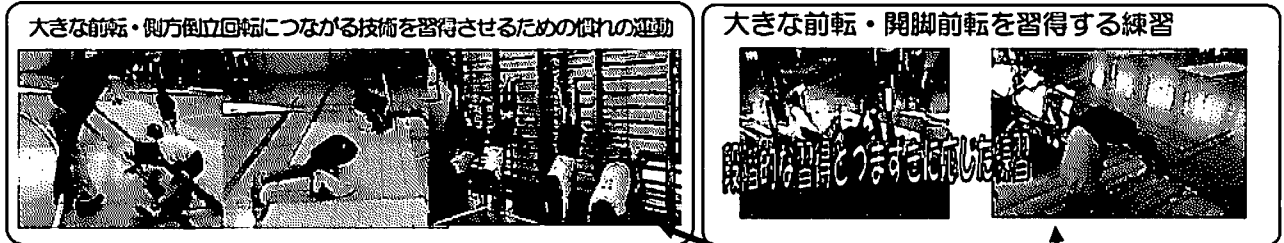
手立て

- ①学習規律の確立（「体育の決まり」の作成・配布）
- ②異質グループによるリーダーを中心とした教え合い（主に低・中学年）
- ③習熟・課題別グループによる課題を共有した児童同士の教え合い（主に高学年）
- ④友達の運動を見るポイントが明確になる学習用具の作成

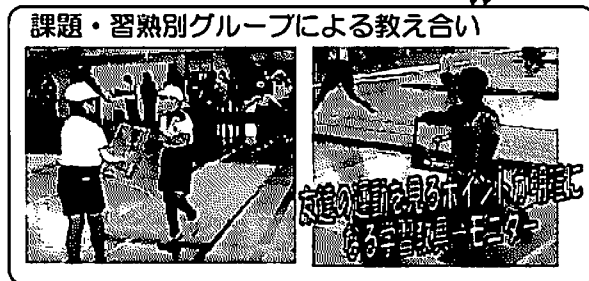
3 実践事例

(1) 授業実践例

【5年4組 齊藤安子教諭 「マット運動」～大きく、美しい技を目指そう～】



	1	2	3	4	5	6	⑦	8	9	10
10	集合・整列・挨拶・健康観察・準備運動・慣れの運動									
20	オリエンテーション ・準備の方法を知る。 ・学習の流れを知る。 ・基礎技術を知る。 ・慣れの運動の仕方を知る。 ・大きな前転にチャレンジする。	ねらい① 大きな前転・開脚前転を正確にマスターしよう！								
30	大きな前転を確実に習得させてから、開脚前転に取り組ませる。 ・足の投げ出し(腰角の開き)による回転加速をねらった練習 ・回転加速を止めない、開脚のタイミングをねらった練習					ねらい② 側方倒立回転とその発展技に挑戦しよう。 ・開始姿勢と立ち上がり姿勢 ・足の振り上げ・踏み切りによる回転加速をねらった練習		側方倒立回転→ホップ側方倒立回転→ロンダードから自分の力に合った技を選択して練習する。		発表会
40	学習のまとめ・次時の予告・後片付け・整理運動・健康観察・挨拶									



(2) その他の実践

① 器械運動の理論・実技研修

各運動の歴史の変遷、運動構造、基本的な技の中にある技術の確認、技術を習得するための練習方法、技の練習方法などについて全職員で研修を行い、指導力向上を図った。



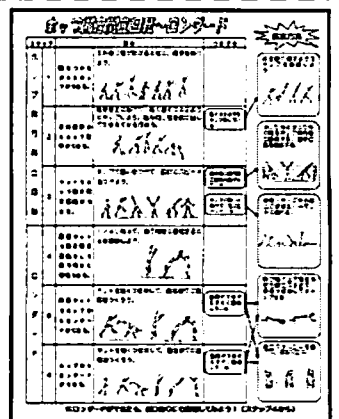
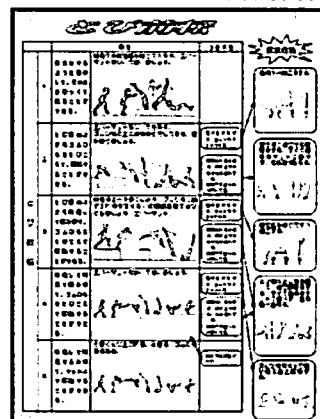
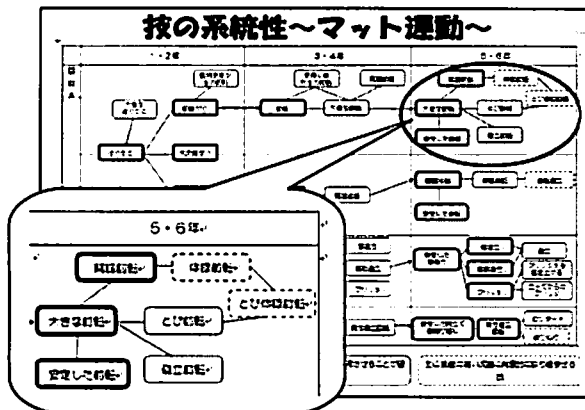
② 技の系統表の作成及びそれに基づいた指導

各技の技術を明らかにし、共通技術のもとで技の系統表を作成した。また共通技術を児童に理解させた上で、技の習得に向けた指導を行った。

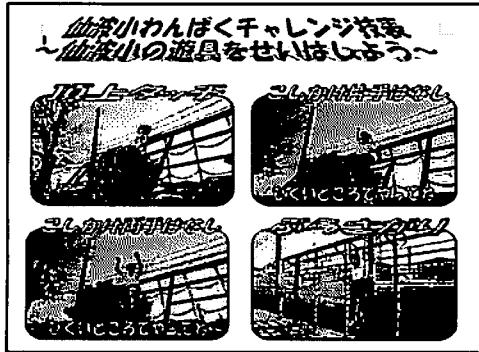
③ スモールステップ及びつまずきの解決

方法を明示した技の学習カードの作成

児童に達成感を味わわせながらスモールステップで技に近づいていく練習と、事前に予想したつまずきを解決する練習を記載した学習カードを作成した。



- ④ 休み時間の遊具の自主的な取り組み
校庭の遊具を活用した30の技を考案し、目標達成児童に認定証を配布した。



- ⑤ 友達の運動を見るポイントが明確になる
学習用具

技の動きの成否がすぐに分かるような用具を使うことにより、教え合いが活発になることをねらった。



- ⑥ 体力貯金の実施

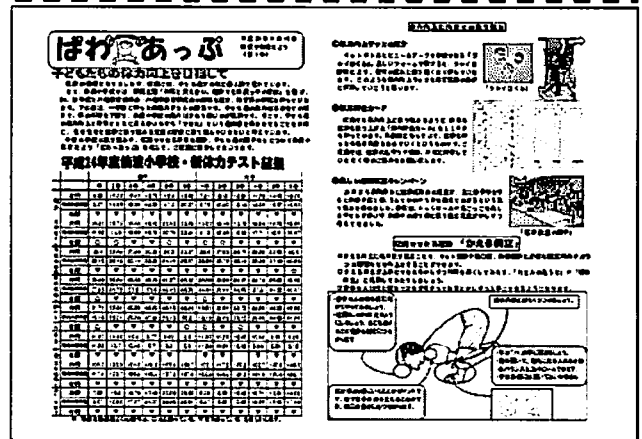
逆さ感覚、バランス等を高める16種類の運動を家庭で自主的にできるようにした。

月		体力貯金しよう！(目標1000点)																												
月		日																												
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31

家庭での運動の推奨！月1000点を目標に。

- ⑦ 体力向上通信の発行

児童の体力の実態、学校での取り組みの紹介、家庭での運動の推奨、運動のポイントを載せた通信を発行した。



4 研究の成果と課題

【成果】

- 本校児童の実態に合った系統的指導、段階的練習とつまずきに応じた練習を複合的に行ったことにより、児童のマット運動の技能は確実に上がり、情意面の向上にもつながった。
- 低・中学年で異質グループによる教え合い、高学年での習熟・課題別グループによる教え合いが、発達段階とうまく適合し、児童相互で声をかけ合いながら運動に取り組む結果となった。
- 運動の生活化を図った休み時間の自主的な運動の取り組みや家庭での運動の推奨が、児童や保護者の意欲・関心を刺激し、休み時間や放課後に遊具や校庭で運動に親しんでいる姿が格段に増えた。

【課題】

- 児童のつまずきの内容は予想される以上に多岐にわたり、複数のつまずきが融合している場合もあり、全児童のつまずきに応じるのは難しい。特に技能的に低い児童はつまずきがほとんど解決できず、毎回同じ練習の繰り返しが続く傾向があった。技能的に低い児童のための指導時間の確保や指導方法の改善が必要である。
- 高学年になるほど、学習が深まるにつれて児童の運動欲求の基準が高くなる傾向があり、たとえ技能が高まっても運動に対する自信まで持てなかつたり有能感を感じられなかつたりする結果となった。満足感・成就感を十分に感じさせられるようにする工夫が必要である
- 運動の生活化を図る取組は、内容の変化がないまま同じ内容で数か月続くと児童の関心が減少し、自主性も減少していった。常に児童の関心を引くような新しい運動や内容の提供が必要である。

研究主題

「豊かなかかわり合いを通して自分から進んで活動できる児童の育成」

～学級活動を基盤とした、学習づくり生活づくりを通して～

川越市立新宿小学校

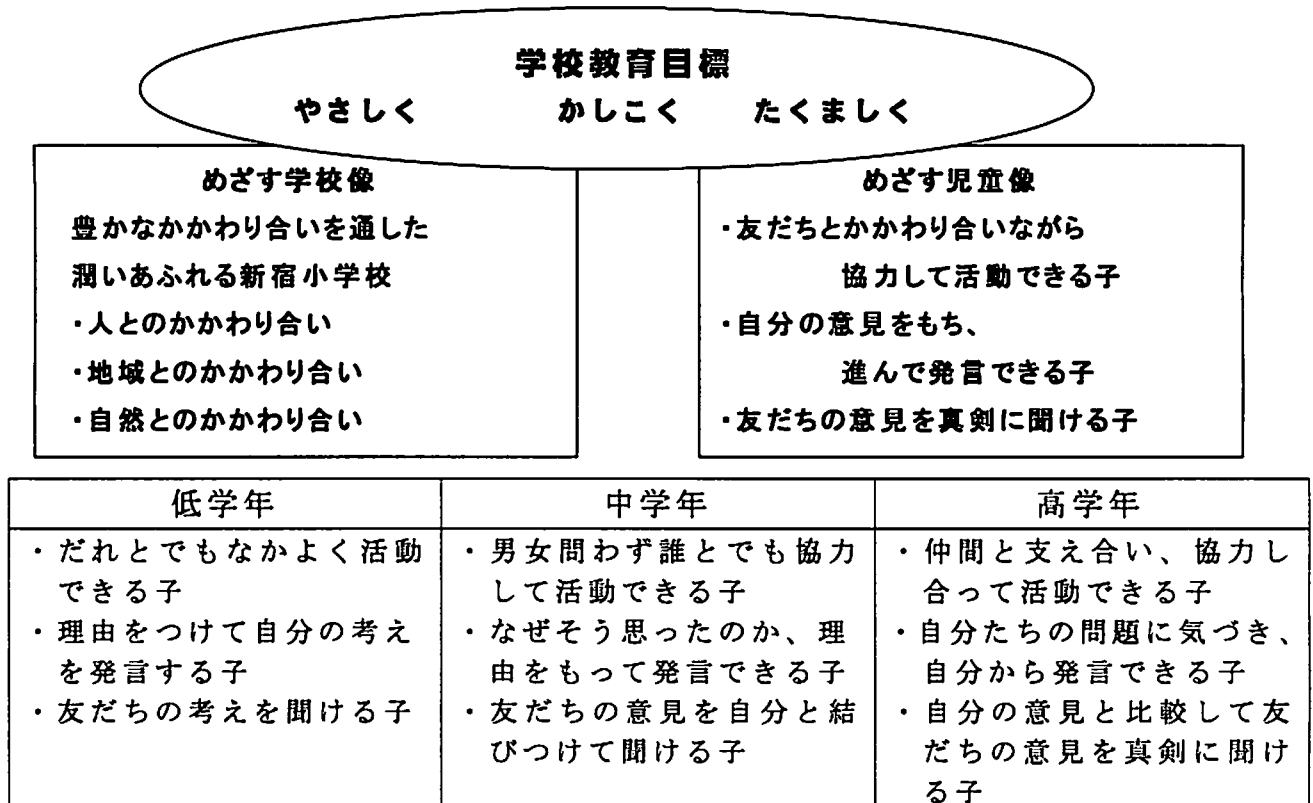
研究のポイント

- 学級活動の基本的な内容をおさえ、だれにでもできるわかりやすい研究を行う。
- 学級活動（１）の授業を中心に児童が「自分から 自分たちで」進んで活動する力を育てる。
- 学級活動で培った力を委員会活動・クラブ活動・縦割り活動等で生かしていける児童を育てる。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

めざす児童像を想定した指導を行い、豊かなかかわり合いの中で進んで活動できる児童の育成を図る。

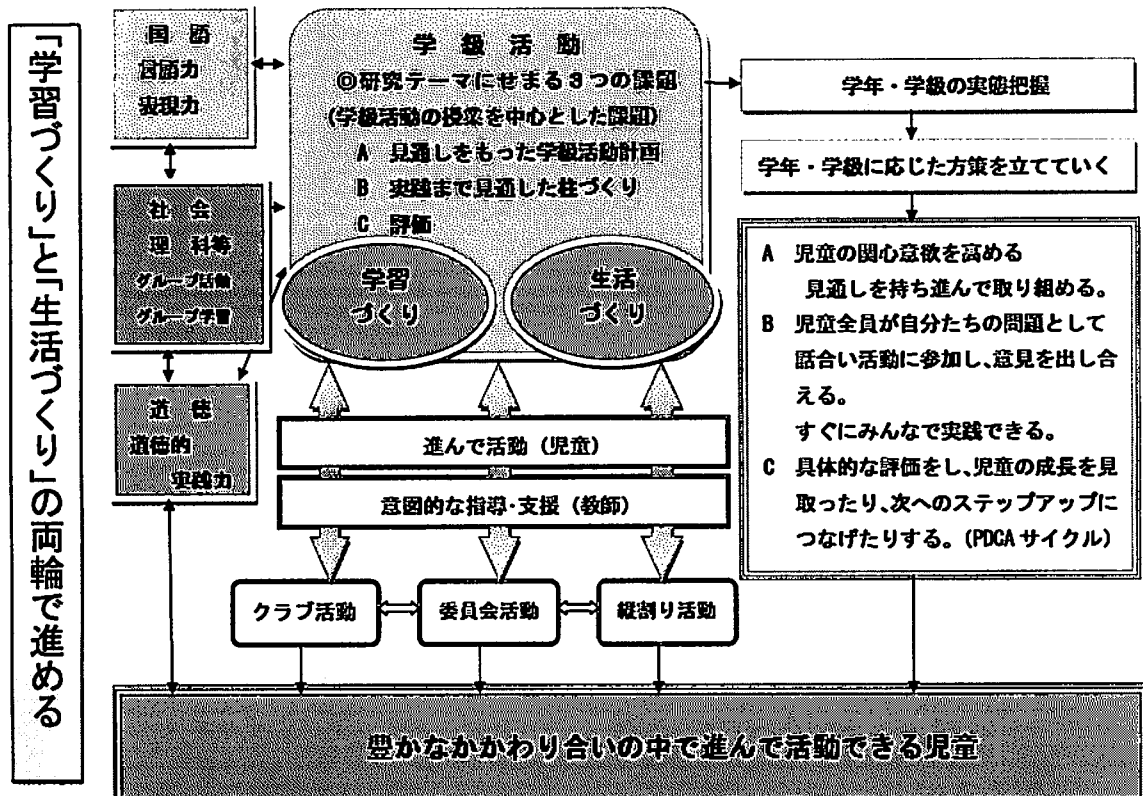


(2) 研究主題設定の理由

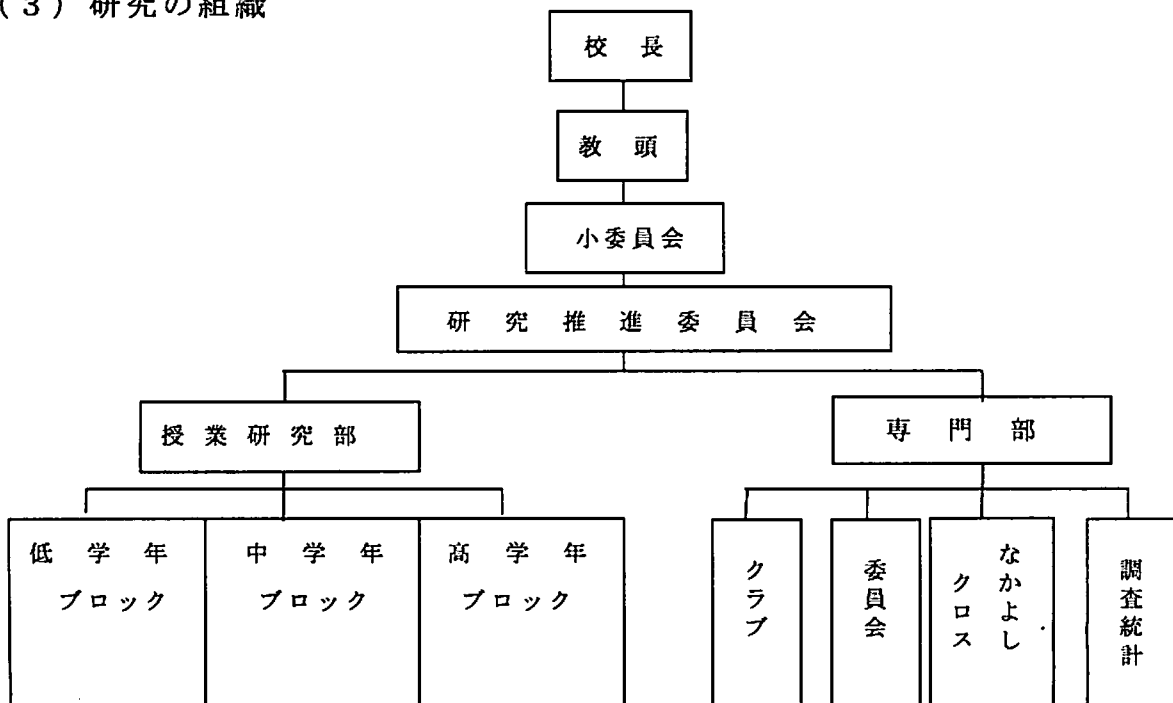
本校の児童は、「明るく素直で元気がよい」「学習に前向きに取り組む」というよさがある。反面、「決められたことはしっかり行うが、自発的には動けない」「人と関わる体験が不足している」という課題がある。

そこで、学級活動を基盤とした学習づくり生活づくりを行い、「自分から自分たちで」進んで活動できる力を育て、学級活動で培った力を委員会活動・クラブ活動・縦割り活動はもとよりその他の活動場面でも生かしていけるようにしたいと考え本主題を設定した。

学級活動を基盤とした、学習づくり生活づくり



(3) 研究の組織



2 研究の内容

(1) 授業研究会

- ① 学級活動グッズの作成、学級活動コーナー・係活動コーナーの設置。
- ② 全学級が学級活動（１）の授業を行い、低・中・高学年ブロック内で授業を見合う。
- ③ 低・中・高学年ブロックごとに1回の授業研究会を行う。

(2) 専門部会

- ① クラブ・委員会・なかよしクロス・調査統計の各専門部に所属し、児童の実態と課題点を挙げる。
- ② 各活動のねらいと方策を明らかにし、全教職員で実践する。
- ③ 教師の振り返りカードを活用し指導を工夫することで、児童の自主性的実践的な態度を育てる。

3 実践事例

(1) 授業研究会

① 研究テーマにせまる手立て

ア 見通しをもった学級活動計画
 学年に応じて、一ヶ月・1学期間等、学級活動計画等を掲示した。

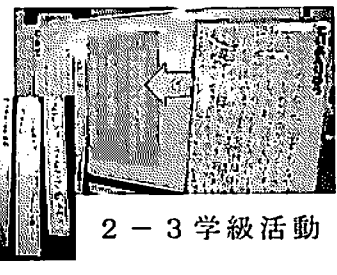
イ 実践まで見通した柱づくり
 1つの議題から考えられる柱を挙げ、学級全体で話し合う必要があることを柱とした。

ウ 評価
 学級活動（１）（２）の補助簿（低・中・高用）を作成し、評価するようにした。

観察		評価	コメント
観察項目	観察結果		
1. 学級活動の準備状況			
2. 学級活動の実施状況			
3. 学級活動の振り返り状況			
4. 学級活動のまとめ状況			
5. 学級活動の継続状況			
6. 学級活動の活用状況			

② 学級活動（1）

全学級が授業をブロック内で公開した。低・中・高ブロックで1回の授業研究会を行った。


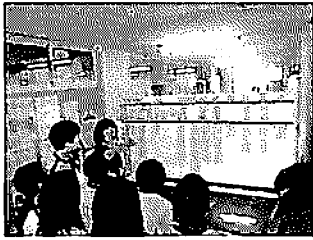



③ 実践

話し合い活動で決まったことを実践し、活動を振り返り、学校や学級生活を豊かにしていく。



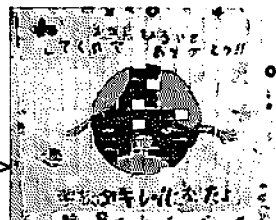
(2) 専門部会

クラブ活動	委員会活動	なかよしクロス
教師の振り返りカードを活用し各活動のねらいと方策を明らかにして取り組んだ。		
話し合いをして、みんなが楽しめる工夫をしていく。	委員会黒板を作成し、自主的活動を促す工夫をしていく。	名前呼び合い、なかよく遊べるようにする。
		

4 研究の成果と課題

- 全学級で授業を見合う活動をしたので、話し合いの仕方がわかるようになってきた。
- みんなで決めてみんなで実践することを積み重ね楽しく活動することで、自分から発言する児童や友だちと協力して活動しようとする児童が増えてきた。
- ◆ 研究テーマにせまる3つの課題を常に意識した学級活動を継続的に行い、児童の成長を支援していく必要がある。

兄弟学年と協力して落ち葉拾いをした落ち葉ゼロ大作戦



3年生児童の日記

21日 二十日
 22日 二十一日
 23日 二十二日
 24日 二十三日
 25日 二十四日
 26日 二十五日
 27日 二十六日
 28日 二十七日
 29日 二十八日
 30日 二十九年
 31日 三十年

研究主題

「すこやかな心と体もち、たくましく生きる泉っ子の育成」
～運動の楽しさを味わい、主体的に取り組む体育科指導の工夫～

川越市立泉小学校

研究のポイント

- 体育の授業研究を通して、教師の授業力、児童の体力向上を図るとともに、授業規律、集団行動、仲間意識等の向上を目指す。
- 授業のみならず、児童の主体的な活動を促したり保護者への生活習慣改善の啓発等の意識向上を図ったりすることで、心身ともに健康な児童の育成を目指す。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

学校教育目標「かしこく ゆたかに たくましく」の具現化を図るために、児童の実態を踏まえ、体育科の授業実践等を通して指導法の工夫改善を図り、体力、規律や精神面の向上を目指す。

(2) 研究主題設定理由

本校の児童は進んで体育や外遊びをする。しかし、新体力テストでは、握力をはじめ、上体起こし、シャトルラン等県平均を下回っている種目がある。逆にボール投げは県を大きく上回っている。これらは普段同じ遊びをしていることが影響していると考えられる。また、集中力、忍耐力の欠如、仲間意識の希薄など、規律面、精神面でも課題が見られる。

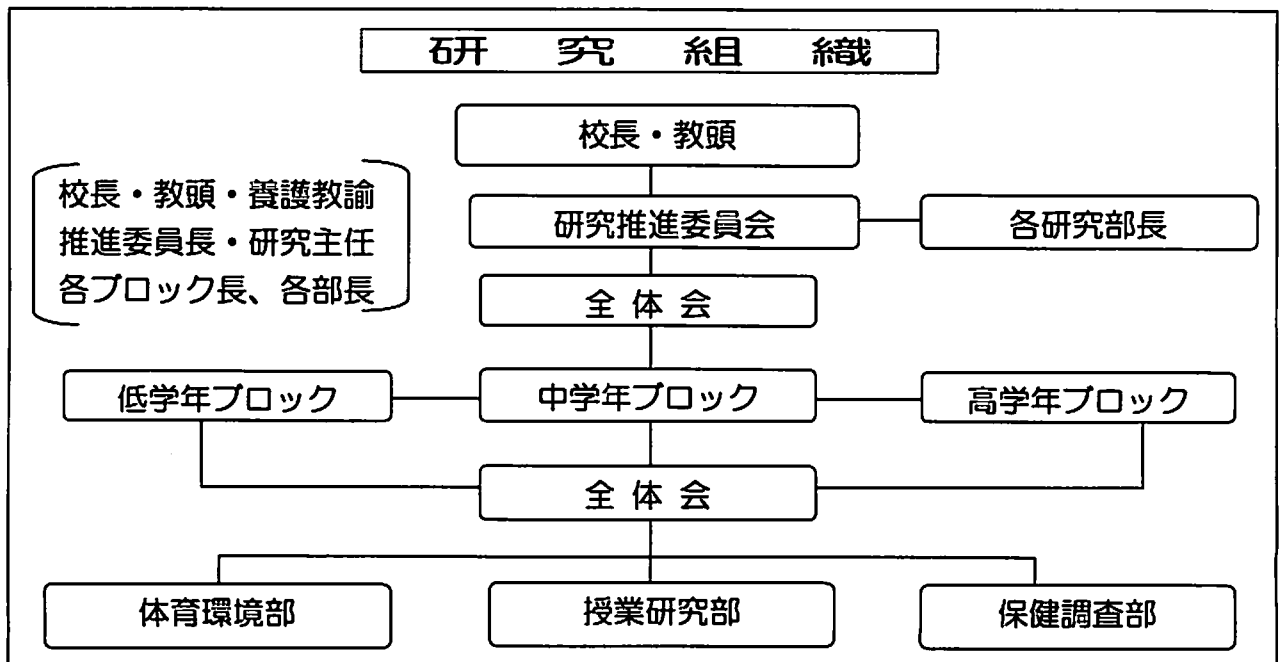
平成 24 年度新体力テスト
結果の県平均との比較

		握力	シャトルラン	ボール投げ
男	△	1	2	6
	▼	5	4	0
女	△	1	3	5
	▼	5	3	1

△: 平均以上の学年数
▼: 平均以下の学年数

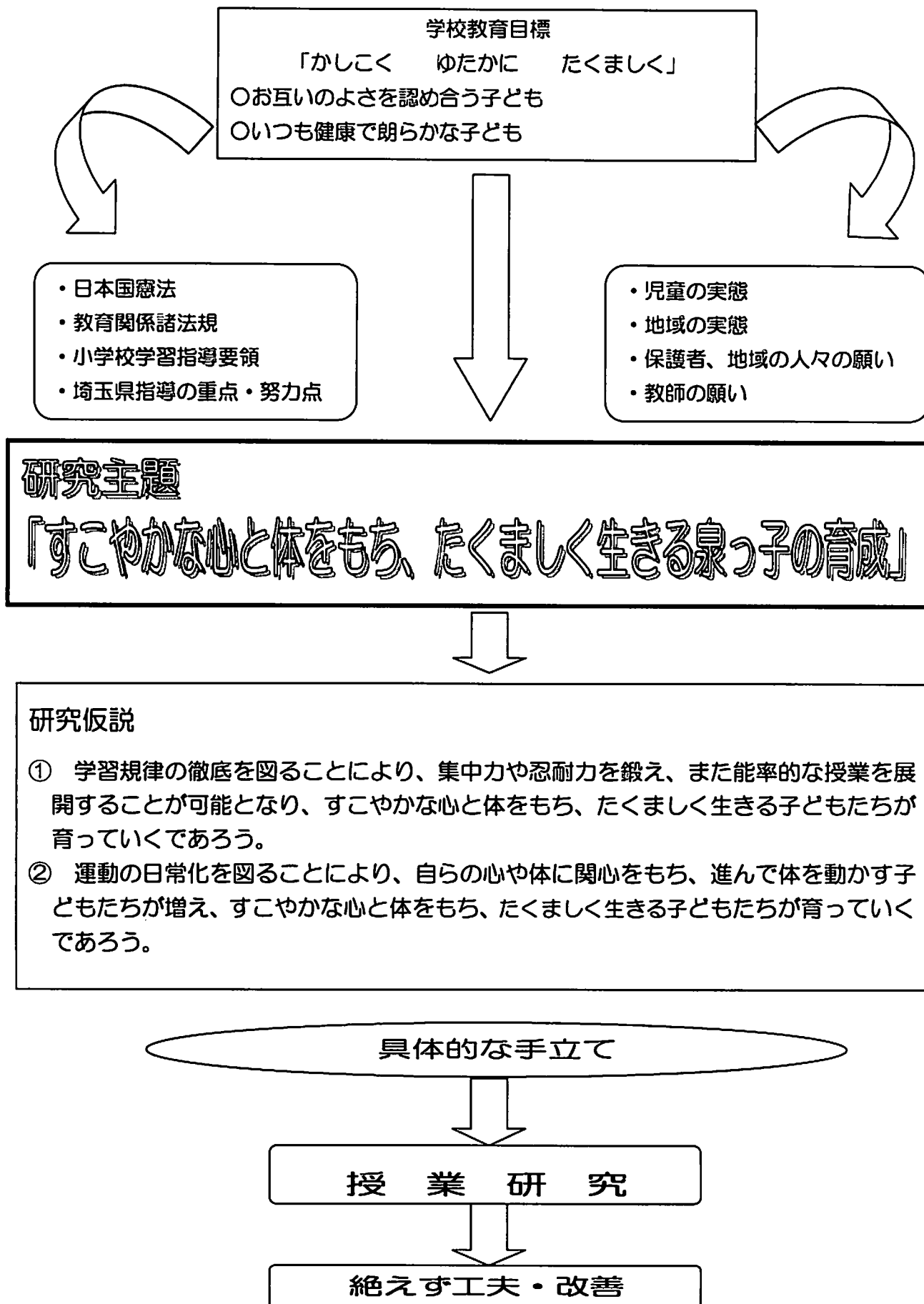
そこで、運動の日常化と多様化、規範意識の向上を図ることが効果的な体力向上につながると考え、本研究課題を設定した。

(3) 研究組織



2 研究の内容

平成24年度 川越市立泉小学校 体育研究の全体構想



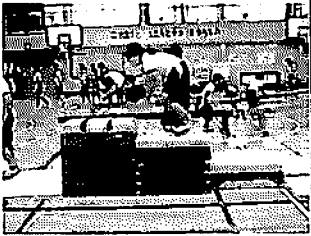
3 実践事例

(1) 単元名 跳び箱運動（器械運動）

(2) 単元の目標

- ① 友だちと協力し、励まし合い、教え合い、安全に気をつけて運動できるようにする。（関心・意欲・態度）
- ② 自分の力に合っためあてをもち、練習の仕方を選んで学習を進めることができるようにする。（思考・判断）
- ③ 自分に合った技や新しい技を、安定した動作で支持跳び越しや回転系の技ができるようにする。（運動の技能）

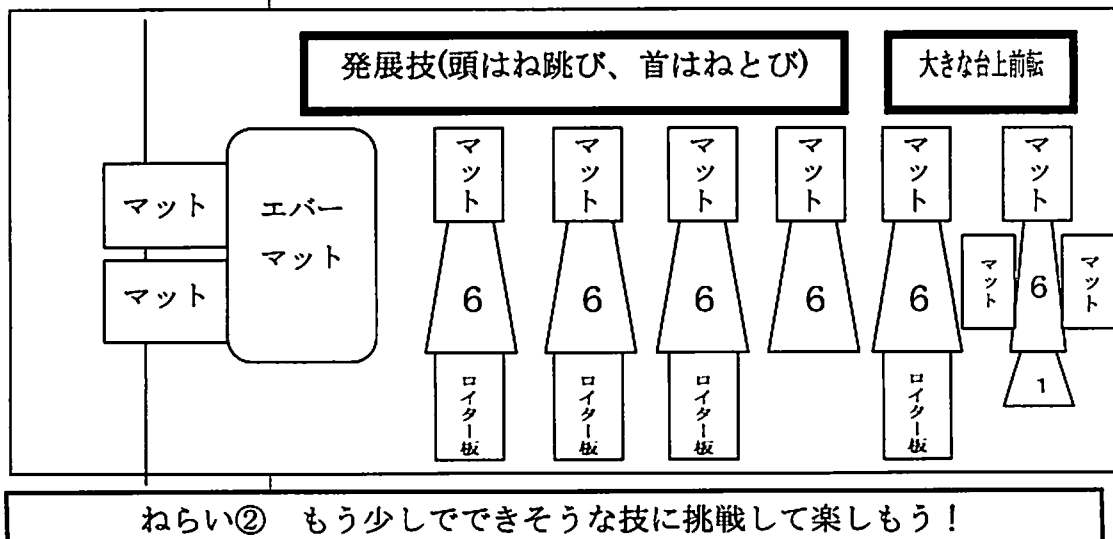
(3) 学習過程

時間	1	2	3	4	5	⑥	7	
	集合・整列・挨拶・健康観察・準備運動・慣れの運動							
10	オリエンテーション ・学習の進め方 ・準備・約束事 ・練習方法 ・技のポイント ・学習カード使い方 ・場の設定の仕方と 分担 ・できる技の確認 ・泉っ子サーキット の分担	泉っ子サーキット					発表会	
20		ねらい① 今できる技を安定した跳び方で楽しもう！		・安定した開脚跳び ・かかえ込み跳び				・安定した台上前転
30			ねらい② もう少しでできそうな技に挑戦して楽しもう！			・大きな台上前転 ・発展技（首はね跳び、頭はね跳び）		
40			片付け・学習のまとめ・整理運動・次時の予告・まとめ					

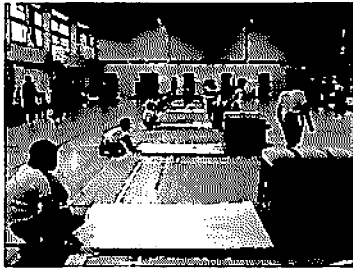
(4) 展開

6. 安定した台上前転を行う
【こつこつ言葉】

○大きな台上前転、発展技につながるように技のポイントを意識して取り組ませる。



7. 本時のめあてを確認する



8. めあてに向けて練習をする

- ・大きな台上前転
- ・発展技

【こっこ言葉】

○めあてを確認し、意欲づけをさせる。

○前時までのつまずきを振り返り、どの技のどのポイントを意識して取り組むのか見通しをもたせる。

○自分の力に合った技と、練習にふさわしい場を選ぶようにさせる。

○技のポイントを意識させるために声に出して言わせる。

○自分で技のポイントを確認させるとともに、見合う児童同士でめあてを確認する。教え合いながら取り組ませ、教師も声かけを行う。

○意欲的に取り組んでいる児童や技のポイントを押しさえ、跳んでいる児童、協力できているグループ、伸びの見える児童を賞賛する。

△技能が低い児童に対しては、ポイントを押しさえた学習ができていないか支援をする。

△安定した台上前転では、跳び箱の横や上にマットを敷いたり、ロールマットを使ったりして練習させるなど、個別に支援をする。

◆自分の力に合った発展技に挑戦し、できる。【運動の技能】

◆友だちのよい点を見つけ、教え合っている。【思考・判断】

こっこ言葉

足立 台上前転

●助走 「ダダダダ…」 「タタタタ…」 「ドドドド…」

・遠くから走る ・スピードを出す勢いをつけすぎない

・リズムを細かく ・自分の手の着く位置を確認

●踏み切り 「パンッ」「ドンッ」

・自分の手の着く位置を再確認 ・手を前にふりだす

・大きな音を立てて ・両足を同時に ・思いっきり強く

●着手 「パンッ」「パンッ」「ドンッ」

・確認した手の位置に置く ・大きな音を立てて

・決まったところに両手同時に ・押すようにして

・なるべく遠くに跳び箱の奥の方へ手をつく

・力をこめて押す ・手がずれないように強くつき放す

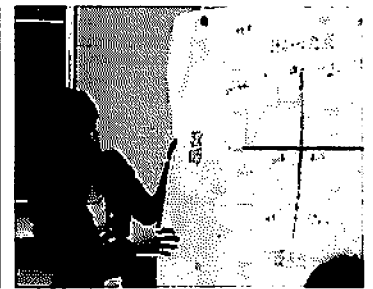
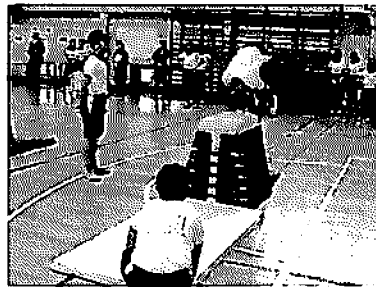
●着地 「スタッ」「ピタッ」「スッ」「シャーン」「キラーン」

・きれいに ・優しく ・手を前に出す ・ひざを曲げて

・動かない ・音を立てない ・両足をそろえて

・ゆっくり止まる ・ぐらつかないようにしっかり立つ

・決めポーズ



4 研究の成果と課題

(1) 成果

- 準備体操から用具の片付けまで、一連の動きを自信をもって教えることができた。
- 児童自らが体や体力に関心をもち、進んで運動に取り組む意欲をもたせることができた。
- アンケート、保健だより等で保護者に啓発することで、食事、睡眠、その他生活の向上を図るための意識を喚起できた。

(2) 課題

- 児童や家庭へ継続した啓発を行い、さらなる意識の向上を図る。
- 体育科の他単元でも有効な教材教具を開発し、活用する。
- 職員が自信をもって指導や助言ができるような実技研修を継続する。

研究主題

子どもたちの自信を育む国語科教育

～「読むこと」を通して、考えを深め合い自分の思いを豊かに表現できる児童の育成～

川越市立霞ヶ関北小学校

研究のポイント

- 国語科における「読むこと」の指導を通して、相手の心情を察したり、自分の考えを積極的に述べたりするコミュニケーション能力の育成に取り組む。
- 「一人読み」に関する系統性を明らかにするとともに、新グループ学習による話し合いを充実させ、自分の考えに自信を持ち、積極的に友達に伝えられる児童の育成を目指す。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

国語科における「読むこと」の指導を通して、自分の考えに自信を持ち、友達に伝えられる児童を育成する。

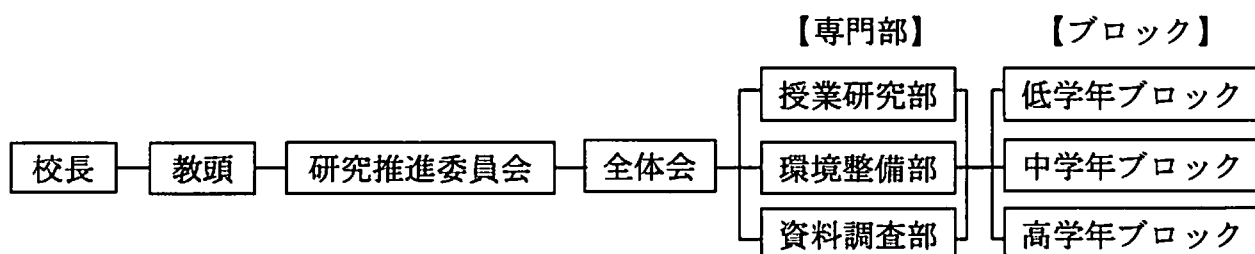
(2) 研究主題設定理由

本校では、学校教育目標「かしこく（あふれる知性）・きよく（豊かな感性）・たくましく（生きる意欲）」を掲げ、「自分のよさ（知性・感性）を発揮し、心豊かにたくましく生きる子ども」の育成を目指している。特に「自分のよさを発揮する」という視点から、児童一人ひとりが自分のよさに気づき、自信を持って物事に取り組み、よりよい学校生活を送ることができることを重点に教育活動を展開している。

しかしながら、本校の児童の実態を見ると、人間関係に不安を感じ、望ましい人間関係を築くことに意欲を欠く児童がいることがわかる。

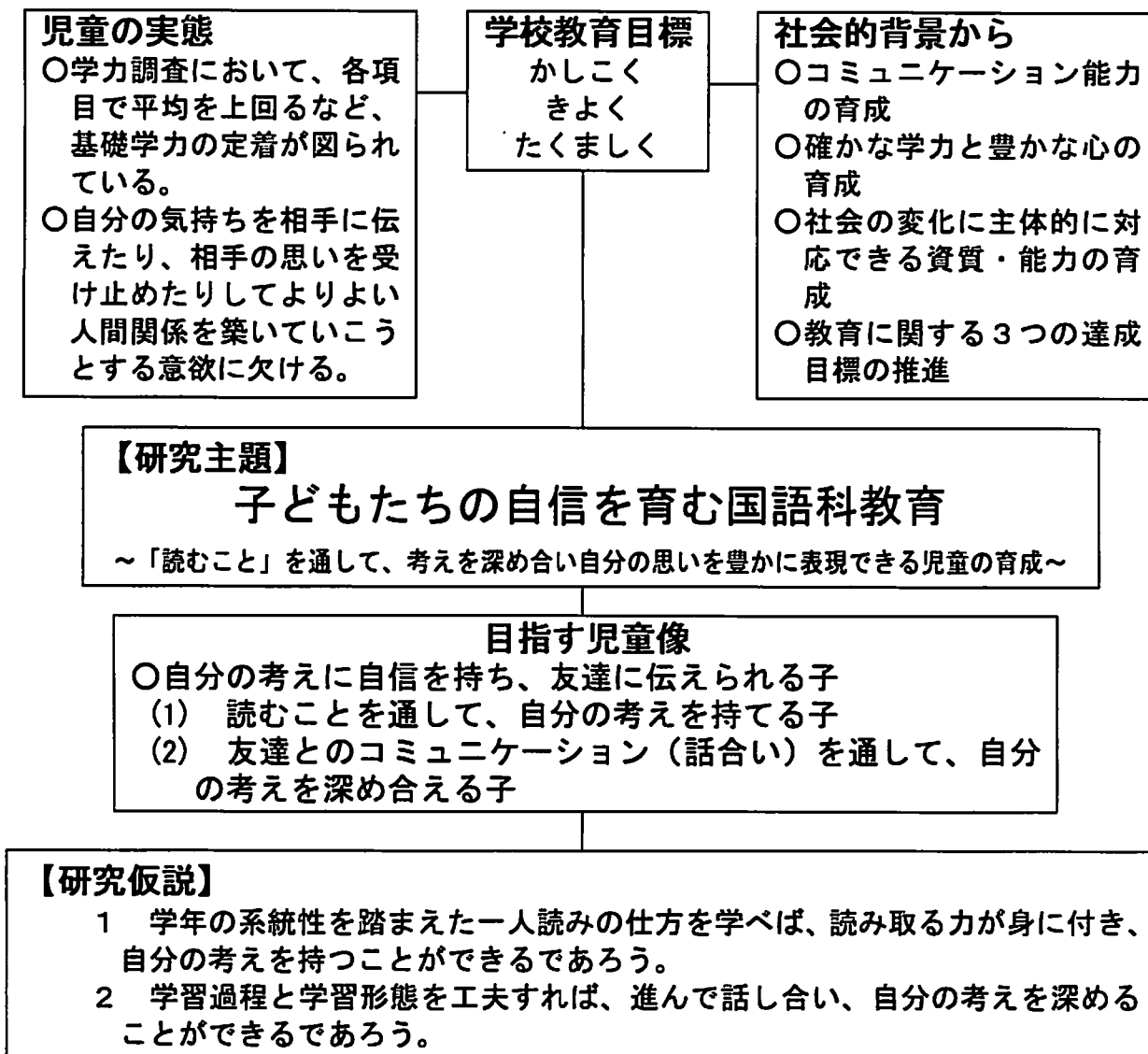
そこで、課題を解決するため、国語科の「読むこと」の指導を通して、相手の心情を察したり、自分の考えを積極的に述べたりするコミュニケーション能力の育成に取り組むことにした。「子どもたちの自信を育む国語科教育」を研究テーマに掲げ、「読むこと」における「一人読み」と「話し合い」の能力を児童一人ひとりに身に付けさせる授業の工夫・改善に努めていく。

(3) 研究組織



2 研究の内容

(1) 研究構想



(2) 研究仮説と具現化のための手立て

仮説1：学年の系統性を踏まえた一人読みの仕方を学べば、読み取る力が身に付き、自分の考えを持つことができるであろう。

→ (手立て) ・学習過程、学習課題や発問の明確化

- ・児童の実態や教材に応じた一人読みの仕方の工夫
- ・読みの観点を明確にした一人読みの工夫
- ・一人読みを支えるワークシートの開発
- ・辞書の活用や調べ学習の充実

仮説2：学習過程と学習形態を工夫すれば、進んで話し合い、自分の考えを深めることができるであろう。

→ (手立て) ・話し合い、交流の場面の意図的な設定

- ・小グループでの話し合い活動
- ・ホワイトボード等の活用

(3) 専門部の取組

① 授業研究部

積極的に授業研究会を実施することにより、共通理解を図りながら研究を進めることができるようにする。また、各学年で取り組んだ具体的な手立てをまとめ、よい効果的な方法を検証する。

ア 研究仮説の検討

イ 授業研究会の計画・実施・協議会の視点の設定

ウ 指導案形式の検討

エ 「一人読み」指導系統表検討

② 環境整備部

掲示物により、児童の国語に対する興味・関心を高めるとともに、児童の言語環境を整備する。

ア 学年掲示板の整備

イ 話合いカード等の作成



③ 調査資料部

国語科における児童の意識や言語活動に関する実態を調査・考察することにより、指導方法の工夫・改善に生かす。

ア アンケートの作成・実施

イ 結果の考察・教師や児童へのフィードバック

3 実践事例

(1) 実践1 (第6学年「生き物はつながりの中に」)

手立て①—主教材である「生き物はつながりの中に」の学習の前に、小教材「感情」において一人読みの習得の時間を設定する。主教材において、身に付いた一人読みの技能を活用できるようにする。

手立て②—話合いの進め方や一人ひとりの役割を明確にする。話合いの視点を「筆者が一番伝えたかったこと」とし、収束的な話合いが行えるようにした。

(2) 実践2 (第5学年「大造じいさんとガン」)

手立て①—読みの視点(大造じいさんの行動・表情、台詞など)を児童に示し、それをもとに一人読みを行うようにした。家庭学習で行った書き込みに教師がコメントを入れることで、児童は自身の読みを確認したり、自信を持ったりすることができる。

手立て②—全体での話合いの前に、2～3人で一人読みの成果を交流し合い、互いの考えの良さを認め合うなどして、発表に対する意欲を高めるようにする。

(3) 実践3 (第2学年「お手紙」)

手立て①—読み取らせたい表現を予め示すことにより、児童が登場人物の気持ちをじっくりと考えることができるようにする。

手立て②—音読の工夫について話合い、その成果をすぐに生かせたり、教師による称賛を得られたりする場を設けることにより、話し合うことのよさを実

感させる。

(4) 実践4 (第3学年「ちいちゃんのかげおくり」)

手立て①—一人読みの視点(ちいちゃんの会話や行動)を明確にすることにより、着目する表現を容易に見付けることができるようにした。小グループでの話合いに生かすことができるよう、書き込みは短冊に行った。



手立て②—ホワイトボードに掲示した教材文に短冊を貼り付けていくことにより、どの表現から想像した書き込みであるのかを視覚的に捉えやすくした。また、机やホワイトボードの配置を工夫し、グループでの話合い・全体の話合いの中でホワイトボードを活用できるようにした。

(5) 実践5 (第4学年「三つのお願い」)

手立て①—第一場面で、「繰り返し出てくる言葉」「登場人物の心情の変化が分かる言葉」などに着目するという一人読みの仕方を学ぶ場を設定した。第二場面以降は、児童が自力で探すことができるようにした。

手立て②—オープンスペースを活用し、ホワイトボードを椅子で囲む形態とした。ブッククラブで培ったグループでの話合いにより、多様な話合いができるようにした。

(6) 実践6 (第1学年「ずうっと、ずっと、大すきだよ」)

手立て①—既習の物語教材「くじらぐも」「ゆうだち」で経験した読み方を振り返ることができるよう、掲示物で視覚的に示しておく。

手立て②—友達の発表と自分の感じ方を比較したり、いろいろな感じ方に気付いたりしやすくするため、グループでの話合いは3人で行った。「自分も同じことを思った。」「友達の～と思ったところがいいなと思った。」など、感想の話形を示し、話合いがスムーズに行えるようにした。

4 研究の成果と課題

(1) 成果

ア 観点を明確にした一人読みにより、児童が読み取るべき表現を見出しやすくなり、書き込みが積極的に行われるようになってきている。

イ 自身の一人読みを交流する場を設定することにより、自分の考えに自信を持ち、全体での話合いで積極的に発言する児童が増えてきている。

ウ グループでの話合いを積極的に取り入れることにより、話合いの目的を意識したり、話合いの仕方を理解したりすることができるようになってきた。

(1) 課題

ア 一人読みの技能や内容、話合いの仕方について、系統的な指導を展開するため、系統表を作成し、全職員が共通理解のもと指導を進めていく必要がある。

イ 新グループ学習についての研修を進め、児童一人ひとりが主体的に話合いに参加することができるようにする。

研究主題

「互いに認め合い よりよい人間関係を築く児童の育成」

～思いや考えを伝え合う話し合い活動を通して～

川越市立川越西小学校

研究のポイント

- 意欲的な話し合い活動をするために、計画委員会等の事前指導を充実させるなど、話し合い活動の環境を整える。
- お互いを認め合う話し合い活動をするために、学年に応じた話し合いの約束や仕方など、意見が言いやすくなる工夫をする。
- 人間関係を深め、集団活動に主体的に関わるために、事後の活動や支援を明確にして適切な評価をする。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

- ① 話し合い活動の環境を整えることにより、学級会の仕方が分かり意欲的に話し合いに参加する子を育成する。
- ② 意見が言いやすくなる工夫をすることにより、お互いのよさを認め合いよりよい考えが持てる子を育成する。
- ③ 事後の支援を明確にして、適切な評価をすることにより、話合ったことを自主的に実践できる子を育成する。

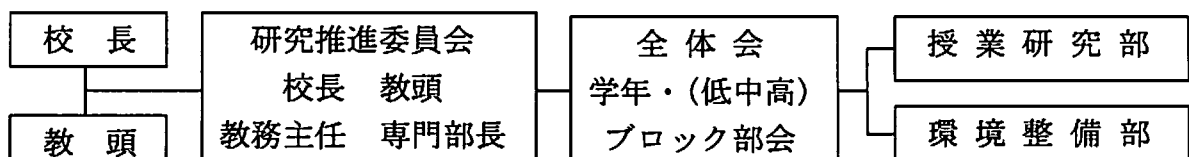
(2) 研究主題設定理由

本校では、平成22年度に国語科で「確かな言語能力を育む国語科指導～読むことの学習を通して～」(川越市教育委員会委嘱)、平成23年度に特別活動「言語活動の充実をめざして～学習規律の確立と話し合い活動を通して～」を研究主題に学校研究に取り組んできた。この2年間の研究を通して、「自分の考えを進んで表現すること」や「発表の仕方など、自分の考えを相手にしっかりと伝えること」などに課題があることが明らかになった。

また、本校児童の実態としては、「友達と上手く関われない」「自分の気持ちや思いを相手に上手く伝えられず、些細なことでトラブルになる」など、相手の気持ちを思いやった言動に欠ける面が挙げられる。

以上のことから、特別活動の話し合い活動を通して、よりよい人間関係の醸成を目指し、研究主題を「互いに認め合いよりよい人間関係を築く児童の育成」と設定し、研究を進めることにした。

(3) 研究組織



2 研究の内容

【 学校教育目標 】

自ら進んで学び、心豊かにたくましく生きる児童の育成

【 目指す児童像 】

自ら進んで学ぶ子

思いやりのある子

たくましい子

【 研究主題 】

互いに認め合い よりよい人間関係を築く児童の育成

～思いや考えを伝え合う話し合い活動を通して～

【 目指す児童像 】

学級会の仕方が分かり意欲的に話し合いをする子

お互いのよさを認め合いよりよい考えがもてる子

話し合ったことを自主的に実践できる子

【研究課題1】

意欲的な話し合い活動をするために、話し合い活動の環境を整える。

【研究課題2】

お互いを認め合う話し合い活動をするために、意見が言いやすくなる工夫をする。

【研究課題3】

人間関係を深め、集団活動に主体的に関わるために、事後の支援を明確にして、適切な評価をする。

【 手 立 て 】

- ①事前指導の充実に取り組む。
 - ・計画委員会の活動計画
 - ・学級会の手引きの作成
- ②特別活動に関わる環境を整える。
 - 学級会コーナーの工夫
 - 話し合い活動の仕方の掲示
 - 学級会ノートの工夫と活用

【 手 立 て 】

- ①学級会の話し合いの約束を決め、意識させる。
- ②学級会の進め方を明確にする。
 - 議題への気付きの育成
 - 提案理由の作成
 - 話し合いの仕方
 - ・話形・意見の種類
 - ・「自分もよくて、みんなもいい」意見の決定

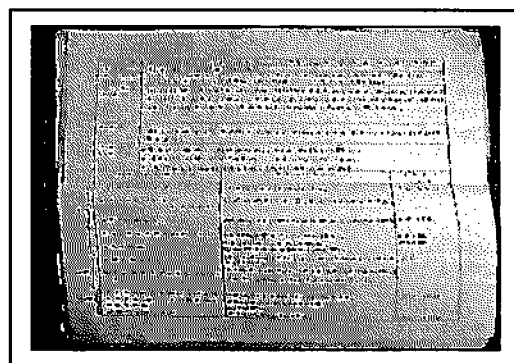
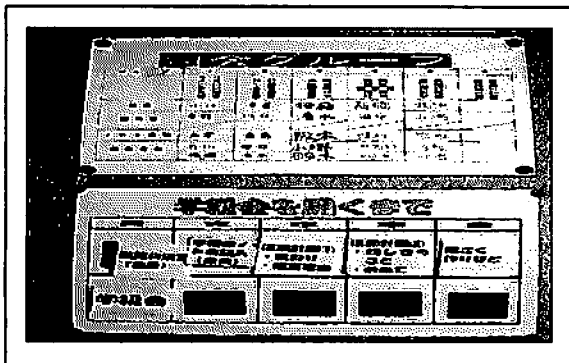
【 手 立 て 】

- ①事後の活動のめあてを持たせ、自己評価を行う。
- ②事後の活動に相互評価を取り入れる。
 - 振り返りカード
 - 集会の感想

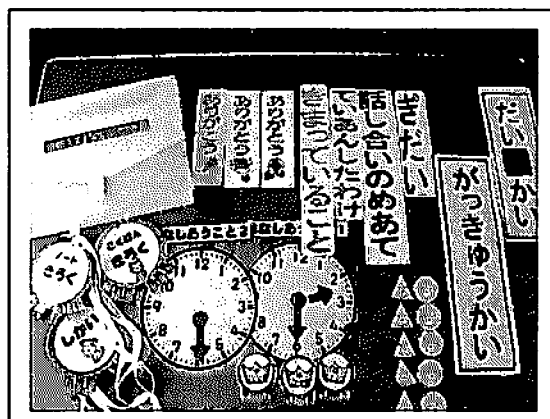
3 実践事例

(1) 研究課題1の「手立て」の実際

- ① 事前指導が充実するように、計画委員会の活動計画表や学級会の手引きを作成した。

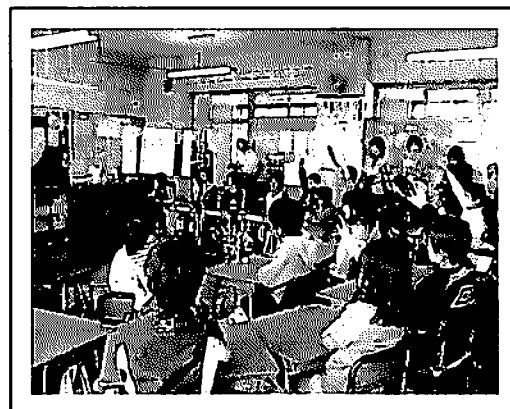
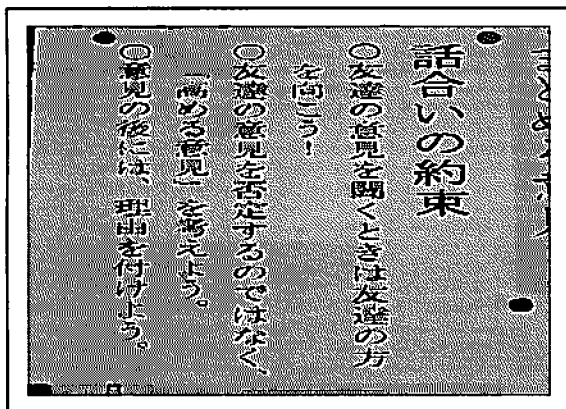


- ② 特別活動に関わる環境を整え、学級会コーナーや話し合い活動の仕方の掲示物、学級会グッズを作成し、話し合い活動に活かすことができた。



(2) 研究課題2の「手立て」の実際

- ① 学級会の話し合いの約束を決め、意識させる。

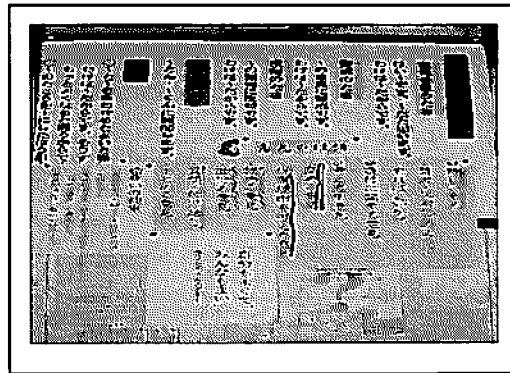
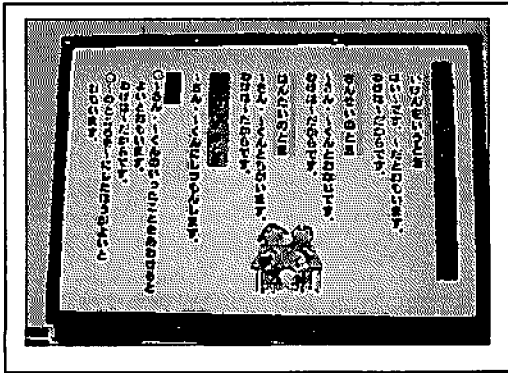


- ② 学級会の進め方を明確にする。

- 議題への気付きを育てるために、議題例を掲示した。また、集会活動の議題ばかりでなく、学級の諸問題にも目を向けさせるために、教師による声かけや提案カードの色分けなどを行った。
- 提案理由の作成について共通理解を図った。Ⅰ提案した背景や現状Ⅱ学級での

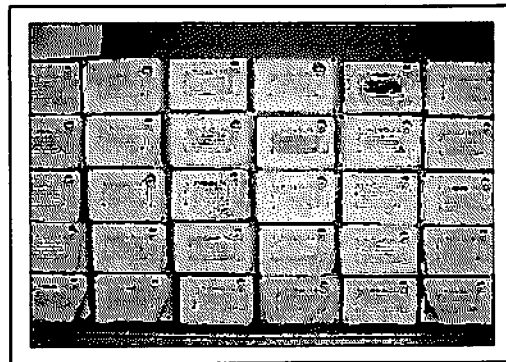
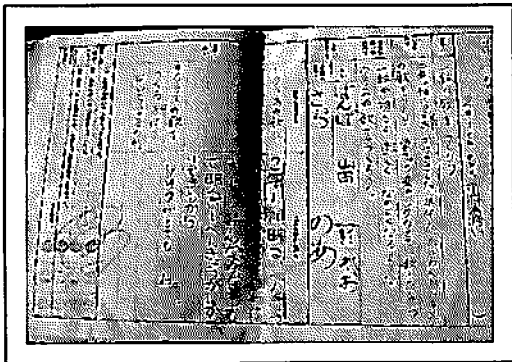
課題Ⅲ話し合いをすることで目指す学級像を入れる。

- 話し合いの仕方や話形の掲示物を作成し、意識させる。



(3) 課題研究3の「手立て」の実際

- ① 事後の活動のめあてを持たせ、自己評価を行う。



- ② 事後の活動に相互評価を取り入れる。

- 事後の活動後にめあてを守り頑張った人へ称賛の声かけをする時間を設ける。
- 事後の活動に意欲的に取り組んでいた児童へカードを送る。

4 研究の成果と課題

【成果】

- 話し合い活動をするための環境整備（学級会コーナー・学級会グッズ）をすることによって、学級会を意欲的に取り組むことができた。
- 学級会の話し合いの約束を意識させたことによって、進んで発表できる児童が増えてきた。
- 話し合い活動が充実したことにより、事後の活動への意欲を持つことができ、準備や個々の役割を積極的にできるようになってきた。事後の活動を通して学級の雰囲気もよくなってきた。

【課題】

- 環境整備は年度当初の共通理解を図ることが大切であり、学級会コーナーの例示などをして計画的に行う必要がある。
- 学級会の約束や系統性を持たせた学年の目標をつくり、学級会を行ったが、更に意識させて身に付けさせていく必要がある。
- 事後の活動のめあてを持たせ、自己評価を行ったが、時間の確保や発達段階に応じた自己評価の工夫などが必要である。また、学級会のノートへのめあての記入の仕方でも学年に応じたものにしていきたい。

研究主題

「生徒の自主的行動力を伸ばす」～確かな学力の育成にむけて～

川越市立山田中学校

研究のポイント

- 生徒の主体的・自主的行動力育成に向けた本校教育活動全般の深化・充実を図るものとする。
- 今回の研究取組に当たっての「学力」の捉え方を、先の中教審答申で示された「生きる力を育むための“確かな学力”」と捉えることとする。この「生きる力」の育成に当たっては、「豊かな心の育成」や「たくましい体力の向上」と併せて、バランスよく育てていくものとする。
- 本校の教育実践のうち、本校独特の『いいもの』を積極的に取り上げる。

1 研究の概要

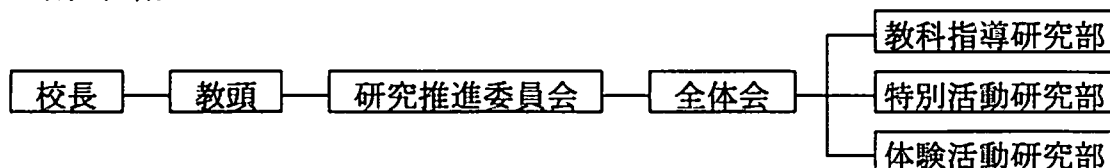
(1) 研究のねらい

「生きる力を育むための“確かな学力”」をしっかりと身につけるためには、生徒が自ら意欲的に諸活動に取り組むことが肝心である。本研究は、生徒の前向きな気持ちや自主的行動力を伸ばすにはどんな手立てがあるのかを整理し、深化させ、今後の本校の教育活動に生かすためのものである。

(2) 研究主題設定の理由

現在、本校の生徒は明るく素直で学校生活全般に落ち着いた状況にあり、過去2年間の実績では、学力や体力面でも着実な成果を上げており、現状の教育活動や指導体制等は、保護者や地域等からの信頼に耐えうるものと自負している。そこで、現在のような順調な教育活動が実践されているここ数年の本校の現状を検証し、教育活動実践の見直しや深化・充実を図ることにより、今後も長期的に現在の状況が継続されていくことを目指したいと考え、本課題研究に取り組むこととした。

(3) 研究組織



2 研究の内容

(1) 教科指導研究部

- ① 生徒の自主性や主体的な行動力を育む、学習指導法の工夫・改善
- ② 基礎学力の定着をめざして、家庭学習を習慣化させる指導方法等の工夫・改善

(2) 特別活動研究部

- ① 生徒の自主的・主体的行動力の育成
- ② 生徒の自治力の育成（リーダーの育成）

(3) 体験活動研究部

- ① 地域とのよりよい連携による、特色ある教育活動の実践

② 体験的活動を中心とした生徒の自主的・主体的行動力の育成

3 各部の取組

(1) 教科指導研究部

① 国語

授業開始時に暗唱した古典文の発表を学級全員で行っている。内容は既習、未習を問わず、有名な古典の文章を対象としている。これにより、日本語文のリズムを感得することに役立っている。また、授業では、小説や詩などの文学的文章をはじめ、説明文なども含めて、内容に関する読後の感想発表を自由に行い、生徒相互の思考の交流を図っている。これにより教材文への関心や興味を高めて、文章理解を自主的に進めていくことの一助としている。

② 社会

毎授業の始め、5分間の小テストを実施している。内容は、基礎的基本的なもので、すべての生徒が取り組める内容である。満点の場合にはスタンプを押していき、生徒の主体的な態度を育成した。また、授業では、生徒の興味関心をかき立てるような資料の提示や、ワークショップを取り入れるなどして、生徒が受動的にならないよう工夫した。それによって、川越市の学力テストでは現3年生は2回とも市の平均を大きく上回り、確かな学力の育成につながっている。

③ 数学

計算分野の各単元を5段階に分けた小テストを作成し、10問中8問正解で合格として実施した。授業での実施、および不合格者には昼休みや放課後などの再テストを実施した。段階別に分類したため、合格不合格により、理解が不十分な箇所が明確になった。それによって、学習すべき箇所が具体的になり、生徒にとっては取り組みやすく、また、合格を目標に家庭学習の充実にもつながった。

④ 英語

英語は週4時間あるため、1つの単元をじっくり学習することができる。その際、4技能をバランスよく取り入れている。導入ではピクチャー等を使い、生徒が十分に気付いた上で言語活動を行っている。言語活動もワンパターン化しないよう、毎回工夫している。また、定期的に読みのテストを行い、生徒への定着を図っている。書くことに関しても、教科書の文の一部変えて書かせたり、ドリルプリントを使い、さらに定着できるよう工夫している。多くの生徒は英語特有の音を恥ずかしく発することができるため、聞くことや話すことに対し積極的に活動できていることは成果である。

⑤ 美術

制作手順と達成度を把握することができる学習カードを利用している。生徒の記入欄に「制作状況や相談」という見出しをつけた。これによって、授業の感想欄として終わるのではなく、今やるべき課題を生徒自身が把握することができた。学習指導を補助する美術室経営として、制作手順の掲示をした。さらに、教室に設けた自由に利用できる素材コーナーも、自主的な活動につながっている。

⑥ 保健体育

授業開始時の体育委員を中心としたクラスランニングや準備体操・補強運動の実

施や個人個人の目標の明確化や課題達成度が把握できるように学習カードを工夫し、生徒の自主性や主体的な行動力を育むようにした。特に長距離走の授業においては、能力別に個々の記録の伸び率が分かるようにするなど多面的な評価ができるようにした。今後の課題としては、すべての領域・単元について上記のような工夫された学習カードの作成に取り組みたい。

(2) 特別活動研究部

① 学級活動の充実

② 生徒会活動の充実

ア 生徒会が地域の様々な機関と協力し、活動する

○ エコキャップ回収運動を地元企業のパイオニアと連携

学区内にある(株)パイオニア川越工場が環境貢献事業の一環としてペットボトルキャップの回収に取り組んでおり、本校生徒会もこの活動に協力している。自分の活動が他者に役立っていることを実感させ、このような行為が進んで行えるようにさせることが目的である。

○ 特別養護老人施設「アイリス」でふれあい活動と奉仕作業

生徒会の一組織・福祉委員会が主宰する活動で、学区内の特別養護老人施設「アイリス」を訪問し、利用者との交流や奉仕作業を行っている。

《具体的な取り組み》

◇訪問日時 各学期末 放課後(午後2時間程度)

◇事前の活動

(・担当教師による日程の調整、参加人数の決定)

- ・福祉委員会から全校生徒への参加呼びかけ
- ・参加希望生徒に対する講習会の開催(講習会修了証の発行)
- ・参加生徒の決定、役割分担、打ち合わせ

◇当日の活動

・現地到着、手洗い・うがい

・始めの会

福祉委員会委員長に進行を任せる。スタッフから注意事項を聞き、挨拶。

・活動(1時間程度)

『ふれあい活動』

施設利用者の方と一緒にレクリエーションや制作活動をしたり、おしゃべりをしたりする。スタッフやボランティアの方が進行してくださる。

『作業活動』

車いすの掃除や施設内の清掃作業などをスタッフの方の指示で行う。

・終わりの会

委員長よりお礼と感想発表、挨拶。プレゼントをお渡しすることもある。

* 毎回参加者を募り、30名程の生徒が訪問している。この活動を通して、自ら進んで他者に役立つ行動がとれるようになることを期待している。

③ 学校行事の充実

イ 行事毎に実行委員会を立ち上げての取組:

○ 秋に行われる文化祭を本校では「あすなろ祭」と称し、実行委員会を組織し、合唱コンクールの運営、体育館の装飾、全体の運営などを工夫しながら生徒が取り組んでいる。

○ 「3年生を送る会」は、1、2年生が3年生に感謝と励ましの気持ちを表すことを目的とし、全生徒が協力して一つの行事をつくりあげていく中で連帯感や達成感を味わうことを狙っている。

ウ 体育祭縦割り団での活動:

○ 体育祭の取組を色別対抗にし、競技の説明から練習まで、三つの学年を縦割りにした団毎に行う。3年生が団長となり、生徒の士気を鼓舞しつつ、異年齢集団がまとまって動けるようなはたらきかけを工夫しながら行っている。

(3) 体験活動研究部

① 総合的な学習の時間の充実

山田地区の特色である「米作り」について、その歴史や育て方まで地域の方々から学び、田植えや稲刈り等の実体験をする。いろいろと調整役をするのが山田地区地域子どもサポート委員会であり、多くの地域の方々の支援を受けている。田植えの仕方から、かまどでの炊飯の方法まで、地域の方々から生徒は直接指導を受け、学んでいる。

② 地域の行事への参加

ア 地区の体育祭への協力

山田地区の住民の運動会に、野球部員が補助員として参加する。指示を受けての行動・連絡や報告など、人と接する手法を学ぶ場であり、コミュニケーション能力の向上が期待できる場である。

イ 地元のお祭り「かかしまつり」への参加

かかしの材料の準備と、生徒がまつりに参加する時の実行委員会との調整を山田地区地域子どもサポート委員会に要請している。今年でまつりに参加して10年目となる。地域の行事に参加することで地域の老若男女の方々との生触れ合いをしている。あまり周到な準備を取らず、生徒たちが地域の方と話しながら「祭り」を成功させるような方針をとっている。

③ 成果と課題

多くの体験活動に、生徒は達成感や満足感を得ていることが感想文等からうかがえる。自ら考え判断する場面を意図的に設け、経験を蓄積することによって、新たな活動に見通しを持つことができるようになってきている。

自主的活動力を育むために体験活動が大切であることは説明を要しないが、学校の中で体験活動を行うことには限界がある。このような状況を解消するために、地域の力を借りることは大きな効果がある。学校の中にはない活動の場が得られるばかりでなく、地域住民との交流が行える点にも意義がある。本校の教育目標は「ふるさと山田・川越に自信と誇りを持てる生徒の育成」である。この目標を達成するためには、地域との関わりを深めることが欠かせない。山田地区を体験活動の場として維持するために、地域の方々と信頼関係を築く大切さを、日頃から職員一人ひとりが意識する必要がある。